

ニ編入スルコトヲ得ヘシ。
第四、豫算ノ協賛事後ノ承諾

此二項ハ更ニ款ヲ更メテ論スル所アルヘシ。

第二款 豫算協賛權ノ範圍

第一、歳入ニ關スル豫算協賛權

歳入ニ關スル豫算協賛權ハ、憲法第六十四條ニハ、

國家ノ歳出歳入ハ、毎年豫算ヲ以テ帝國議會ノ協賛ヲ經ヘシ

ト規定セルニ關セス。永久法律制ヲ採用シ、租稅ニ付テハ

新ニ租稅ヲ課シ及稅率ヲ變更スルハ法律ヲ以テ之ヲ定ムヘシ憲法第六十二條

現行ノ租稅ハ更ニ法律ヲ以テ之ヲ改メサル限ハ舊ニ依リ之ヲ徵收ス同第六十條

三條

又國債ニ付テハ、

國債ヲ起シ……………帝國議會ノ協賛ヲ經ヘシ第六十二條第三項

ニヨリテ前述ノ如ク法律ヲ以テ規定シ、手数料ニ付テハ憲法第六十二條第二項
但シ報償ニ屬スル行政上ノ手数料及其他ノ收納金ハ前項ノ限ニ在ラス

ニヨリテ司法手数料ハ法律ヲ以テ規定シ、行政手数料ハ命令(勅令)ニ依リテ規定
セラル、カ如ク、總テ法規ノ定ムル所ニ從ヒテ徵收セラル、カ故ニ、議會カ豫算
トシテ協賛スル範圍ハ殆ント無シト云ハサル可カラス。

第二、歳出ニ關スル豫算協賛權

歳出ニ關スル豫算協賛權ハ、帝國議會ノ享有スル所ナリ。然レトモ、コレモ一部自
由議定制ヲ採用シタル結果、種々ノ制限アリテ、議會ノ權能ヲ束縛セリ。其ノ種類
ハ次ニ之ヲ説クヘシ。

(1) 皇室費、帝國憲法第六十六條ニ曰ク、

皇室經費ハ、現在ノ定額ニ依リ、毎年國庫ヨリ之ヲ支出シ、將來増額ヲ要スル
場合ヲ除ク外、帝國議會ノ協賛ヲ要セス。

茲ニ現在ノ定額ニ依リ、トハ、憲法施行當時ノ定額ノ謂ニシテ、金額三百萬圓
トス。

(2) 既定繼續費、同第六十八條ニ曰ク。特別ノ須要ニ因リ、政府ハ豫メ年限ヲ定メ、繼續費トシテ帝國議會ノ協賛ヲ求ムルコトヲ得。

故ニ繼續費ハ、皇室費ト異リ、憲法上始ヨリ當然永久費タルノ性質ヲ有スルモノニアラスト雖モ、一旦議會ニ於テ之ヲ可決シタル以上ハ、此議決ハ議會ノ權能ヲ拘束シ議會ハ將來之ヲ遵奉スルノ義務アルモノナリ。

(3) 憲法第六十七條ノ經費、是ニ付テハ、新ニ章ヲ設ケテ次ニ論スヘキカ故ニ茲ニ之ヲ説カス。

以上ノ三種ハ、即チ議會自由議定權ノ範圍外ニ立ツモノナリ。其他ノ經費ニ付テハ、議會ハ自由ニ之ヲ議決スルノ權能アリ。廢除刪減ハ多數決ト兩院ノ調和トニ依リテ自由ニ之ヲナスコトヲ得ヘシ。

第三款 事後ノ承諾

第一〇承諾ノ性質

承諾ト協賛

前款ニ説明セル協賛トハ積極的ノ觀念ニシテ議會カ或ル議案ノ必要ヲ認メテ其發布ヲ希望スルコトヲ表示シ、其成立ニ參與スルモノナルニ反シ、茲ニ云フ所ノ承諾ハ消極的ノ觀念ニシテ、唯議會ニテ異議ナキコトヲ表示スルモノナリ。議會ヨリ進ンテ其成立ヲ希望スルコトヲ表示スルモノニアラス。今承諾ト協賛トハ差異ヲアクレハ左ノ如シ

- (1) 承諾ハ議會カ異議ナキコトヲ表示スルモノナリ。協賛ハ議會カ其成立ヲ希望シ其成立ニ參與スルモノナリ。
- (2) 從テ承諾ノ場合ニハ承諾不承諾其一ヲ擇ハサル可カラス、之ヲ修正スルコトヲ得ス。反之協賛ノ場合ニハ、議會ハ隨意ニ修正ノ權ヲ行フコトヲ得ヘシ。
- (3) 承諾ニハ事前ノモノト事後ノモノトアリ得ヘシ。例之議員逮捕ノ場合ノ許諾ハ事前ノモノニシテ、其他ノ場合ハ事後ノモノナルカ如シ。然ルニ協賛ハ成立ニ參與スルモノナルカ故ニ、事前ノモノ、ミニテ事後ノ協賛ナルモノナシ。
- (4) 議案若シ協賛ヲ得サレハ乃チ不成立ニ了ルモノナリ。然レトモ政府ヲ非難スルモノニアラス。反之事後承諾カ不承諾ノ結果ヲ見ルトキハ、議院ハ上奏

其ノ他ノ手段ヲ用ヒテ政府ヲ非難スルコトヲ得ヘシ。

而シテ、我憲法上、財産ニ關シテ事後承諾ノ場合ヲ認メタルハ、次ノ二項ニ説クモノニ限レリ。

第二、豫算補充支出、豫算外支出。

帝國憲第六十四條第二項ニ曰ク。

豫算ノ款項ニ超過シ、又ハ豫算ノ外ニ生シタル支出アルトキハ、後日帝國議會ノ承諾ヲ求ムルヲ要ス。

茲ニ豫算ノ款項ニ超過シタル支出ト云フハ、即チ補充支出ヲ云フモノニシテ豫算ノ款項ニ於テ一定ノ金額カ見積ラレタルモ、同種類ノ事柄カ發生シテ、豫定額以上ニ費用ヲ要シタル場合ニ、第一豫備金ヨリ支出スルコトヲ云フ。反之、豫算ノ外ニ生シタル支出トハ、或ル事件發生ノタメ金額ヲ要スル場合ニ於テ、豫算中ニ相當セル款項ヲ欠キ、豫算中ヨリ支出スルコト能ハサルトキニ、第二豫備金ヨリ支出スルコトヲ云フ。

之ヲ以テ、兩者ハ等シク豫算ニ見積ラレタル以外ノ金額ヲ支出スルモノナルモ、

其費用カ豫算ノ款項ニ存在スルヤ否ヤニ由リテ區別セラル。而シテ二者等シク後日帝國議會ノ承諾ヲ得サル可カラズ、茲ニ後日ト云フハ、必スシモ次期ノ議會ト云フ意味ニアラス、次期ノ議會カ解散セラレ承諾案ヲ提出スルノ違ナキトキハ、更ニ其ノ次ノ議會ニ之ヲ提出セサル可ラス。

而シテ此二者ヲ支出スル金額ニ付テハ、憲法第六十九條ニ規定アリ。曰ク

避クヘカラサル豫算ノ不足ヲ補フ爲ニ、又ハ豫算ノ外ニ生シタル必要ノ費用ニ充ツル爲ニ、豫備費ヲ設クヘシ。

會計法第七條ニハ、此二者ヲ分チテ規定シ、豫算ノ不足ヲ補フモノヲ第一豫備金

ト云ヒ、豫算ノ外ニ生シタル費用ニ充ツルモノヲ第二豫備金ト云フ。

第三、財産上必要ノ處分。

憲法第七十條ニ曰ク。

公共ノ安全ヲ保持スル爲緊急ノ需用アル場合ニ於テ、内外ノ情形ニ因リ、政府ハ帝國議會ヲ召集スルコト能ハサルトキハ、勅令ニ依リ財政上必要ノ處分ヲ爲スコトヲ得。

前項ノ場合ニ於テハ、次ノ會期ニ於テ、帝國議會ニ提出シ其ノ承諾ヲ求ムルヲ要ス。

故ニ此ノ場合ニハ、普通ノ緊急勅令發布ノ時ト異リ、帝國議會ヲ召集スルコト能ハサル事狀ノ下ニアラサル可ラス。又此ノ場合ハ處分ナルカ故、其效力一時ニ止マルモノニテ將來永ク存續スヘキモノニアラス。從テ普通ノ緊急勅令ノ如クニ、議會ニ於テ不承諾ノ場合ニ政府ハ將來ニ向テ其ノ效力ヲ失フコトヲ公布スルノ必要ナシ。唯不承諾ノ結果ハ、議院ヨリ上奏其他ノ手續ニ由リテ其ノ處置ヲ非難セラレ、コトアルノミ。
終リニ述フヘキハ、此場合ト豫算外支出トノ關係ナリ。此財政上必要處分モ亦一種ノ豫算外支出ト云フコトヲ得ヘシ。然レトモ、事件金額巨大ニシテ到底第二豫備金ヲ以テ支出スル能ハサル場合ニ於テハ他ノ措置ヲ取ラサル可ラス。コレ憲法第七十條ヲ要スル所以ナリ。其必要ノ處分トハ、財政上ノ一切ノ處分ヲ包含スルモノトス。

第三章 憲法第六十七條ヲ論ス

第一節 立法ノ理由

第一、自由議定ノ短所

歳出豫算ノ自由議定ハ原則トシテ採用ス可キモノナルモ、之ヲ豫算全部ニ擴充スルノ不可ナルコトハ前章中既ニ一言セリ。蓋シ國家ハ一方ニ無限ノ權力ヲ行ヒ得ルト同時ニ、一方ニハ箇人ニ對シテ支出ノ義務ヲ負擔スルコトアリ。此ノ義務ノ負擔カ、法令ノ結果又ハ契約ノ結果ナルトキハ、國家ハ辭ヲ籍リテ其義務ヲ果サ、ルカ如キコトアル可ラス。然ルニ國家ノ豫算ナルモノハ、年々議會ノ協賛ヲ經ル所ナルカ故ニ、其ノ一部分ヲ自由議定ノ範圍外ニ卓立セシムルコトナクシテ、國家ハ遂ニ其ノ負擔シタル義務ヲ果サ、ルノ結果ニ陥ラサル可ラス。是レ實ニ箇人ニ對スル損害ノミナラス、又國家自身ノ損害ト云ハサル可カラス。

第二、救済ノ方法

之ヲ以テ、諸國ノ學者ハ多ク之カ救済ノ方法ニ付テ論セリ。

(1) 第一ノ方法ハ、永久總額金設置ナリ。即チ或ル一定ノ金額ヲ定メ其ノ金額ハ常ニ議會ノ自由議定ノ外ニオカントスルモノナリ。

(2) 第二ノ方法ハ、基準豫算ノ制度ニシテ、永久支出トシテ不變ニ存積スヘキ費目ヲ類纂シテ、所謂永久歳出豫算ナルモノヲ設ケ、之ニ對シテ自由議定ニ委スヘキ毎年歳出豫算ヲ設クヘシト云フニアリ。

(2) 第三ノ方法ハ、裁判所設置ノ制度ニシテ、政府ト議會トノ爭議ヲ決定スル爲ニ、一ノ高等裁判所ヲ設ケ、此ニ於テ豫算自由議定ノ不當ナル處置ヲ防止セントスルニ在リ。現ニオランダ、デンブルグ國、千八百五十二年ノ憲法第二百九條ニ之ヲ規定セリ。

以上ノ方法ハ、皆一理ナキニアラスト雖モ、多少ノ欠點ヲ包含スルモノ、如シ立法者ハ此等ノ制度ノ欠點ヲ避ケントシテ憲法第六十七條ノ規定ヲ設ケタリ。

第三憲法第六十七條ノ規定
我憲法ノ規定ハ、以上ノ制度ト異リ、或種ノ歳出ハ政府ノ同意ナクシテ議會ハ廢除削減スルコトヲ得サルヲ規定ス。故ニ其費目ニシテ廢除削減スルヲ得ヘキ性

質ノモノタラハ、政府ノ同意ヲ得ルトキハ、常ニ之ヲ變更スルヲ得ヘシ。是レ獨逸ノ碩學ラバンド氏カ會テ唱導シタル所ニシテ、豫算中ニ永久歳出ヲ置ク制度ノ代リニ此制度ヲ採レル所以ナリ。

第二節 條文ノ内容

第一總說

憲法第六十七條ニ曰ク。

憲法上ノ大權ニ基ツケル既定ノ歳出、及法律ノ結果ニ由リ又ハ法律上政府ノ義務ニ屬スル歳出ハ、政府ノ同意ナクシテ、帝國議會之ヲ廢除又ハ削減スルコトヲ得ス。

故ニ本條ニ包含セラル、歳出ハ。

- (1) 憲法上ノ大權ニ基ツケル既定ノ歳出。
- (2) 法律ノ結果ニ由ル歳出。
- (3) 法律上政府ノ義務ニ屬スル歳出。

ノ三者ナリ。以下順次之ヲ説明スヘシ。
第○三○大○權○ニ○基○ツ○ク○既○定○ノ○歳○出○

(1) 大權ニ基ツケル歳出

憲法上ノ大權トハ、學者ニ由リテ其說ヲ異ニスレトモ、憲法第一章第五條以下第十六條並ニ第三十一條、第三十四條、第四十二條、第四十三條、第七十條、第七十三條等ヲ指稱シタルモノトスルヲ妥當トス。

大權ニ基ツケル歳出トハ、即チ以上ノモノニ基ツケル歳出ニシテ、明治二十四年度ノ豫算ニ付テ規定セル會計法補則明治二十三年八月ニ由レハ、其ノ種類左ノ如シ。

- (1) 文武官ノ俸給及文官退官賜金
- (2) 陸海軍々々事費、憲兵費、屯田兵費。
- (3) 賞勳年金及褒賞費。
- (4) 外國條約及約束ニ依レル支出。
- (5) 各廳ノ廳費及經常修繕費。

而シテ今日ニ於テハ、費目ニ増減アリ必スシモ之ト一致スルヲ保シ難キモ

大體ニ於テ同一ナリト云フヲ得ヘシ。
(2) 既、定、ハ、歳、出、

憲法第六十七條ハ、單ニ大權ニ基ツケル歳出ニアラスシテ、既定ノ歳出ナルコトヲ規定セリ。此既定トハ、何ヲ意味スルヤニ付キテ、三様ノ說アリ。

(イ) 前年度ノ豫算ニ由テ定マレル歳出ナリトスル說。

(ロ) 法律命令又ハ條約ノ如キ、將來ニ向テ效力ヲ有スヘキ國家ノ法規ニ由テ、定マレル歳出ナリトスル說。

(ハ) 既定トハ、前說ノ如ク法規ノ既存ヲ云フニアラスシテ、金額ノ既存ヲ云フニアリトスル說。

右ノ内第一說ハ、豫算ノ效力ヲ一年以上ニ亘ラシムルモノニシテ、正當ナル根據ヲ欠ケリ。第二說ハ、一理アルカ如シト雖モ、若シ斯クノ如クンハ、政府ハ恣ニ官制其他ノ命令ヲ發布シオキテ、之ニ必要ナル費額ヲ憲法第六十七條ニ從ヒテ要求スルコトヲ得ヘク、政府ノ權能ヲ過度ニ擴張セシムルノ失アリ。唯第三說ハ、此等ノ欠點ナク解釋上、最モ穩當ナルモノナリト信ス。

第三〇法律ノ結果ニ由ル歳出

(1) 其範圍

人或ハ憲法第六十七條ヲ解シテ、政府ノ義務ニ屬スル歳出ヲ二種トシ、一ヲ「法律ノ結果ニ由ルモノ」トシ、他ヲ「法律上政府ノ義務ニ屬スルモノ」トス。然レトモ、普通ニハ「法律ノ結果ニ由ル歳出」並ニ「法律上政府ノ義務ニ屬スル歳出」トシテ併置スルモノナリ。法律ノ結果ニ由ル歳出トハ、特別ノ法律(若クハ其執行命令)ノ規定ハ爲ニ經費ヲ必要トスル場合ヲ云フモノニシテ、前述セル會計法補則ニ由レハ、其種類左ノ如シ。

- (1) 帝國議會經費。
- (2) 裁判所並會計検査院經費。
- (3) 恩給扶助料、罷役恤金、及死傷手當。
- (4) 徴兵費。
- (5) 徴稅費。
- (6) 囚徒費。

- (7) 遞信事業及船路標識費。
- (8) 内外國難破船費。
- (9) 沖繩縣及小笠原島地方費。
- (10) 備荒儲蓄。
- (11) 北海道拂下土地買上代。
- (12) 恩賞及救助費。

而シテ、爾後發布セル法律ノ結果ニ由ル歳出ニハ、諸官立銀行資本並利益補助、諸種ノ獎勵金ノ如キハ、其ノ著シキモノナリ。

(2) 豫算修正ノ結果

以上ノ諸歳出ハ、法律ノ結果ニ由ルモノニシテ、政府ノ同意ヲ得スンハ廢除刪減スルコト能ハサルモノナリ。然ラハ政府ノ同意ヲ得ルトキハ、自由ニ之ヲ廢除刪減スルヲ得ヘキヤト云フニ、必スシモ然ラサルナリ。何トナレハ、法律ハ豫算ニアラサルカ故ニ、法律ハ豫算ノ如何ニ關セス儼トシテ存在スヘク、其ノ法律ハ生存ヲ保ツ範圍内ニ於テハ、必ラス費額ヲ要スルモノニシテ、其レ以上ノ廢除刪減ハ、政府ノ同意如何ニ關セス性質上不可能ノモノナレ

ハナリ。

要之豫算ノ修正ニハ一定ノ限度アリテ、政府ノ同意如何ニ關セス無制限ノモノニアラス。

第四〇法律上政府ノ義務ニ屬スル歳出。

(1) 其範圍。

法律上政府ノ義務ニ屬スル歳出トハ、政府カ箇人若クハ團體ニ給付ヲナスノ意思ヲ表示シ、之ニ由テ法律カ一般ニ認ムル義務ヲ政府ニ於テ負擔スル場合ヲ云フ會計法補則ニ列記スルモノ左ノ如シ。

- (1) 神社費。
- (2) 公債償還利子及拂手數料。
- (3) 既ニ定マレル效力アル命令ニ依リ毎年各地方ニ付與スヘキ公共工事費補助及警察費聯帶支辨金。
- (4) 沖繩縣諸錄。
- (5) 既ニ定レル效力アル命令ニ依リ航運鐵道製造殖産ノ會社及病院學校ニ付與スヘキ補助又ハ利子保證。
- (6) 雇外國人ノ俸給恩給及手當。

(7) 法律上ノ賠償及訴訟費。

(8) 諸拂戻金。

(9) 國庫金取扱費。

(01) 預金利子。

(11) 既約アル地所家屋借料。

(2) 豫算修正ノ結果。

此ノ場合モ、法律ノ結果ニ由ル歳出ノ場合ト同シク、政府ノ同意アルニモセヨ、無制限ニ廢除削減スルコト能ハサルモノナリ。蓋シ政府ハ、其行爲ニヨリテ法律カ一般ニ認ムル義務ヲ負擔スルモノナルカ故ニ、妄リニ政府ノ意思ノミヲ以テ之ヲ變更スルコトヲ得サレハナリ。其ノ削減ノ程度タルヤ、必ラス其ノ相手方ハ、承諾ヲ得ルモノタラサル可カラズ。

第三節 同意ノ請求

第一〇同意請求ノ時期

以上三種ノ歳出ハ、憲法第六十七條ニ於テ、政府ノ同意ヲ得テ廢除削減スヘキコ

トヲ規定セリ。然ラハ議會カ其ノ同意ヲ求ムルノ時期ハ何レニ在リヤ、是レ我國初期ノ帝國議會ニ於テ議論ノアリシ所ナリ。

(1) 同意ノ請求ヲ兩院通過ハ後ニスルハ不可ナリ。

甲論者ハ曰ク、政府ニ同意ヲ求ムルニハ、兩院合議シ其ノ議ノ確定シタル上、之ヲ政府ニ送付シ、政府同意スヘシトスレハ之ヲ施行スヘシ、故ニ條文ニモ「帝國議會」ト稱シ「議院」ト云ハスト。乙論者ハ曰ク、同意ノ請求ハ宜シク、各院ニ於テスヘキモノナリ、兩院合同シテ同意ヲ請求スルカ如キハ、兩院特立ノ原則ヲ破ルモノナリト。蓋シ兩院各獨立ノ特權ヲ有スルハ、兩院制度ノ原則ナリ、然ルニ兩院合同シテ政府ノ同意ヲ求ムヘシトスルトキハ、衆議院先ツ確定ノ議決ヲナサスシテ、豫算案ヲ貴族院ニ移サ、ル可カラス。是レ衆議院未タ豫算案ノ最終議決ヲナサ、ルニ、貴族院ハ既ニ豫算案ノ審議ヲ始ムルモノニシテ、兩院特立ノ原則ニ反スト云ハサル可ラス。之ヲ以テ、後説ヲ以テ正鵠ヲ得タルモノトス。

(3) 同意ノ請求ハ確定議以前ニナスヲ要ス。

既ニ同意ノ請求ハ、一院ニ於テナスヘキモノトセハ、確定議以前ニ於テ同意ヲ請求セサル可カラス。而シテ若シ政府ニシテ之レニ同意セハ、其儘ニ確定議トスヘク、又之ニ同意セサルモ亦其ノ儘確定議トシテ送付スヘキモノトス。第二、議會ノ議決カ豫算議定權ヲ超越シタル場合

前述スル所ニ由リ、一院カ確定議前ニ政府ノ同意ヲ求ムル場合ニ、其ノ豫算ノ修正議決カ豫算議定權ヲ超越シタルトキハ如何。是レ亦我國ノ初期議會ニ起リシ問題ナリトス。

當時衆議院カ修正案ヲ以テ政府ノ同意ヲ求ムルヤ、其ノ覆牒ニ曰ク。

衆議院ハ明治二十四年度歳計豫算ニ對シ確定ノ前ニ當リ憲法上ノ手續ニ隨ヒ政府ニ同意ヲ求メタリ
政府ハ之ヲ審査スルニ修正案ハ官制ヲ變革セントスルノ點ニ就テ豫算議定權ノ區域ヲ超越シタリ
法律ノ結果ニ關スル歳出及契約ノ義務ニ關スル歳出ヲ廢除刪減セントシタルハ政府ノ同意セサル所ナルノミナラス、法律ノ正文ヲ以テ規定シタル事件ヲ豫算ニ依リテ變革セントスルハ又其分界ヲ誤レリ
況ンヤ削減セル金額ニ對シ政府ハ及フ丈議院ノ議決ヲ敬重スルノ方向ヲ取ルコトヲ怠ラサル

ヘシト雖モ此ノ如キ豫算ノ變更ハ行政ノ責ニ當ルモノ、實施シ能ハサル所ナリ
次テ某々議員ノ質問主義書ニ對スル政府ノ答辯ヲ見ルニ曰ク

官制軍制ノ君主ノ大權ニ屬スルコトハ我帝國憲法ノ明文ニ於テ既ニ一點ノ疑義ヲ殘サ、ラシ
メタリ若シ豫算議定權ニ依リテ年々官制又ハ軍制ヲ變動スルコトヲ企ツルコトヲ得ハ行政ノ
大權ハ實際ニ於テ全ク豫算議定者ノ手ニ移ラントス
前述ノ主義ハ既ニ議院ノ是認セラル、所ニシテ更ニ辯明ヲ要セサルナリ今疑問トスル所ハ豫
算ノ議定ニ依リ間接ニ官制ヲ改ムルモ之ヲ以テ政府ノ同意ヲ求ムル時ハ豫算議定權ノ區域ヲ
超越スルモノニ非スト云フニ在ルカ如シ抑憲法第六十七條ハ既定ノ行政組織ヲ基礎トスル上
ニ於テ費額ノ廢除削減ニ對シテ同意ヲ求ムヘキヲ謂フ者ニシテ行政組織其ノ物ニ對シテ同意
ヲ求メテ之ヲ改革スルコトヲ得ヘシト謂フニアラス若シ豫算議定ノ際官制其ノ物ノ改革ヲ起
草シ據リテ以テ費額ヲ定ムルニ至リテハ之ヲ正當ナル豫算議定權ノ區域ヲ守ルモノト謂フコ
トヲ得ス

法律ニ關ル問題ニ付テハ又前項ト同一ノ主義ニ依リ答議スルコトヲ得ヘシ蓋豫算ハ法律ノ基
礎ニ從ヒテ編製セラルヘキモノナリ若シ豫算ニ從フテ假ニ法律ヲ改正シ又ハ間接ニ法律改正
ノ效力ヲ有セシメ然ル後ニ政府ノ同意アルトキハ政府ヨリ或ハ議院ヨリ法律改正案ヲ提出シ
テ以テ其ノ局ヲ結フヘシト云ハ、是レ本末ヲ誤リ從ヒテ前後ノ順序ヲ誤ルモノナリ法律ノ改
正ハ必ヤ立法三部(即チ兩院ト政府)ノ合意ヲ得テ然ル後ニ成立スヘク其決定發布ハ一年又ハ二
年ヲ遅クスルモ知ルヘカラス且各議院ハ前日豫算議決ノ結果ニ依テ後日法律改正案ヲ必然ニ

協賛スベキ義務アルモノニ非ス若シ前日ニ豫算ノ議定ニ依リテ間接ニ法律ヲ改正スルノ結果
ヲ有セシメ而シテ後日法律其ノ物ノ議案ニシテ成立セサルノ事實ヲ生スルコトアラハ政府ハ
法律ニ背キ金額ヲ支出セサルノ場合アルヲ得ヘキカ此ノ如キハ政府ノ同意スルコト能ハサル
所ナルノミナラス政府ノ同意不同意ニ拘ハラズ議院モ亦法律ヲ保護スルノ義務ヲ欠クモノト
謂ハサルコトヲ得ス

實際上若シ斯クノ如キ場合アリトセハ、政府ハ固ヨリ修正案ニ從フヲ得ス、又原
案ヲ執行スルコト能ハス。政府ハ憲法第七十一條ニ由リテ、宜シク前年度ハ豫算
ヲ施行スヘキナリ。

第三、政府議院間ニ合意成立セサル場合

議會カ政府ニ同意ヲ求メタル場合ニ、政府カ容易ニ之ニ同意セハ論ナキモ、若シ
之ニ同意セサルトキハ如何。或ハ曰ク憲法第六十六條六十七條ノ費目ニ付テハ、
政府ノ意專決ノ力ヲ有スルモノナリ、故ニ議會ト政府トノ合意成ラサルトキハ、
政府ハ隨意原案ヲ施行スルコトヲ得ヘシト。
此ノ論ノ誤マレルヤ固ヨリ明カナリ。若シ論者ノ說ノ如クンハ、政府ハ始メヨリ
六十七條ノ歳出ヲ以テ議會ニ提出スルヲ必要トセサルモノナリ。若シ議會ニ提

出スルヲ必要ナリトセハ、合意成立セサルニ當リテ妄リニ原案ヲ執行スルヲ得
ンヤ、而シテ六十七條ノ歳出カ議會ニ提出スルヲ必要トスルハ、憲法六十四條ノ
規定ノ存スルヲ見テ知ルヘキナリ。

第四章 協賛ノ手續

第一節 諸國ノ制度

第一〇〇總說

豫算議定ノ手續ハ、歐米諸國ニ於テ各多少其ノ制度ヲ異ニセリ。然レトモ之レヲ
大別スレハ三種トナスコトヲ得ヘシ。即チ英國式大陸式及ヒ米國式是レナリ。以
下各制度ニツキ簡單ニ説明スヘシ。

第二〇〇英國式

(1) 總說

英國ニ於テハ、每會期ノ初ニ於テ二箇ノ議決ヲナスヲ常トス。即チ一ハ某ノ
日ニ於テ支出委員會ヲ開クヘシト云フモノ。一ハ某ノ日ニ於テ收入委員會

ヲ開クヘシト云フモノ、是レナリ。

此支出收入兩委員會ハ、即チ全院委員會(Committee of Whole House)ニシテ、全院
ノ總議員ヲ以テ委員トナスモノトス。是レ英國式豫算議定法ノ特色トナシ。

(2) 支出委員會

豫算ノ議會ニ提出セラル、ヤ、先ツ豫定ノ日ニ於テ支出委員會ヲ開會ス。
支出委員會ニ於テハ、責任大臣其豫算ニ對シテ全體ノ説明ヲナシ、然ル後各
課目ヲ別々ニ審議シテ投票ヲナスナリ。委員會一回終ル毎ニ、委員會ハ其事
務ノ進歩ヲ議院ニ報告シテ、再ヒ委員會ヲ開クノ許可ヲ乞ハサル可ラス。
議院ハ委員會ノ報告ニ對シ之ヲ調査シテ承認ヲ與フ。

(3) 收入委員會

收入委員會ハ、支出ニ對スル歳入填補ノ方法ヲ定ムルモノニシテ、其ノ第一
ハ職務ハ、固定基金ヨリ政費ヲ支出スルコトヲ承諾スルニアリ。此固定基金
ハ永久的ノ性質ヲ有スル租稅ヨリ拂込マル、モノトス。其第二ハ、職務ハ、大
藏大臣ノ提出シタル新稅案ヲ調査シ、全體ノ支出ニ對スル收入ヲ相適合セ

シムルニアリ。而シテ此新稅案ハ其效力一年度限リノモノトス。
委員會ノ議決ヲ議院ニ報告シ、議院カ之ニ對シテ承認ヲ與フルコトハ、支出
委員會ト異ル所ナシ。

(4) 費目配當條例

英國ニテハ、以上ノ手續ヲ經タル後、議會ノ終期ニ於テ支出各科目ヲ一括シ
テ編製ヲナス之ヲ稱シテ費目配當條例ト云フ。此ノ條例ノ議決ニヨリ、豫算
ハ各行政科目ニ分配セラレ、其明記セル科目ノ目的ニノミ使用スルコトヲ
得ヘシ。但シ彼ノ永久歳出ナルモノハ、永久的ノ法律ニヨリ其目的既ニ夫レ
決定セルカ故ニ、費目配當條例ノ適用ヲ受クルハ、陸海軍費行政費ノ如
キ、毎年移動歳出ニ限ラル、モノトス。

第三〇大陸式

(1) 總說

大陸式ハ、歳入出ヲ同一ノ委員ニ附託シテ審査スル點ニ於テ英國式ト同一
ナリト雖モ、一ハ全院委員ヲ採ルニ反シ一ハ制限委員ヲ採レリ。又之ヲ審査

シ若ハ報告スルノ手段ニ於テモ異ルモノアリ。以下簡單ニ之ヲ説明スヘシ。
(2) 大體議

豫算ノ議定ハ、衆議院ニ於ケル大藏大臣ノ財政演說 (Finanzexposé) ヲ以テ始
マル。此演說ハ、國家財政ノ大體ニ關スルモノニシテ、財政ノ比較對照、歳入出
ノ計算及ヒ經常及臨時要求ノ計算等主要ナル計算ト、根本的意見ニ止マル
モノトス。

議院ハ、之ニ對シテ質問ヲナシ、併セテ豫算討議ヲナシ豫算委員ヲ選定シテ、
之ニ審査セシムルノ決議ヲナスモノトス。

(3) 豫算委員會

豫算委員ノ數ハ國ニヨリテ異レリト雖モ、其ノ選定ハ黨派ハ、勢カニ由テ分
配セララル、モノトス。之レ他ナシ。豫算ノ議定ハ議會勢力ノ神髓ニシテ、豫算委
員會ハ豫算ノ決定ヲ豫定スル重大ノ任務ヲ有スルモノナレハナリ。豫算委員
會ハ、更ニ各分科ニ分レテ審査スルヲ常トス之ヲ以テ、各大臣ハ各分科豫算委
員會ニ出席シテ説明ノ任ニ當ル。各分科豫算ノ議定ヲナストキハ、各委員長

ヨリ豫算委員長ニ報告シ、豫算委員長ハ豫算總會ヲ開キコレヲ議定ス。
豫算委員會ハ秘密會議トシ、該委員ノミ出入ヲ許サルコトヲ常トス。之カ例
外ヲナスモノハ、埃太利、併ニ白耳義ニシテ、議員ハ凡テ傍聽ヲ許サル。

(4) 本會決議

豫算ハ、最後ニ本會議ニ於テ議事ニ附セラレ、確定ヲ見ルモノトス。豫算委員
長ハ豫算委員會ニ於ケル結果ヲ報告シ、之ニ由テ各科目ニ付キ可否ヲ決ス。
然ルニ豫算委員ハ、前述ノ如ク黨派ノ勢力ヲ代表シテ選定セラル、カ故ニ、
其ノ報告即チ多數黨派ノ意見ニシテ、從テ本會議ニ於ケル議事ハ、概テ豫算
委員會ノ決議ト異ル所ナキヲ常トス。

第四、米國式

英國並ニ大陸諸國ニ於テハ、委員會ノ組織カ常ニ統一のニシテ、其議決ハ互
ニ抵觸スルノ憂ナシ。然ルニ米國ニ於テハ、從前ハ豫算ノ科目ニ從ヒ各特別
ナル、永久的ノ委員ニ附托シテ審査セシメタルヲ以テ、勢ヒ各科目ノ議決ハ
一致セサルノ結果ヲ見タリ。故ニ同國ニ於テモ之ヲ改メテ統一の組織トナ

スニ至レリ。

第二節 我國ノ制度

第一、總說

我國ハ、歐米諸國ニ倣ヒ、委員會ハ統一の組織ヲ有スルコト、セリ。而シテ英國式
若クハ大陸式中何レヲ採ルヤト云フニ、大陸諸國ノ制度ニ由リシモノナリ。以下
簡單ニ之ヲ述フヘシ。
第二、大藏大臣ノ說明

議會開會ノ始メニ於テ、政府ハ會計法第五條ニ由リ、總豫算ヲ提出スルト同時ニ、
大藏大臣ハ衆議院ニ於テ豫算ノ全體ニ付テ演說スルヲ常トス。而シテ、議員ハ之
ニ對シテ質問ヲナスノミニテ豫算ハ當然豫算委員會ニ附託セララル、モノトス。
第三、豫算委員會ノ組織

- (1) 豫算委員會ハ、常任委員會ノ一種ナリ貴族院規則第二十八條常任委員會ト
ハ一會期中繼續シテ其ノ任ニ在ルモノヲ云フ議院法第二十四條其ノ人數ハ貴族院

ニ於テハ四十五人衆議院ニ於テハ六十三人トシ、委員會中其人員最モ多シ、以テ其ノ重ヲオクコトヲ知ルヘシ。

(2) 豫算委員選定ノ方法ハ、每會期ノ始ニ於テ各部ニ於テ無名投票ヲ以テ總議員中ヨリ選舉シ最多數ヲ得タル者ヲ以テ當選人トス。同數者二人以上アルトキハ、抽籤ヲ以テ之ヲ定ム。是レ各議院規則貴族院規則第二十九條ノ定ムル所ナリ。然レトモ我衆議院ノ慣例ニ從ヘハ、各部ノ選舉ハ其部員中ヨリ選出スルヲ以テ例トス。即チ各部通算選舉法ニ由ラスシテ普通ノ各部選舉法ニ由ルモノトス。

(3) 豫算委員長ハ豫算委員會ニ於テ之ヲ互選ス。議院法第二十一條互選ハ無名投票ヲ以テシ、最多數ヲ得タル者ヲ以テ當選人トス。同數者二人以上アルトキハ、抽籤ヲ以テ之ヲ定ム。貴族院規則第三十五條我衆議院ハ慣例トシテ此場合ニ多ク年長者ヲ採レリ。

豫算委員長ノ代理トシテ、貴族院ニテハ副委員長、(一名)衆議院ニテハ理事(三名)ヲ選舉ス。其選舉ノ方法ハ、委員長ノ場合ニ同シ。

第四〇豫算委員會ノ會議

(1) 審、查、期、限、 政府ヨリ豫算案ヲ衆議院ニ提出シタルトキハ、豫算委員ハ其ノ院ニ於テ受取リタル日ヨリ二十一日以内ニ審査ヲ終リ議院ニ報告スヘシ。議院法第四十條而シテ此其院ニ於テ受取リタル日トハ我衆議院ノ先例ニ由レハ議長カ議院ニ報告シタル日ヨリ起算スルモノトス。

(2) 查、定、ノ、方、針、 豫算ノ審査ハ其ノ調査事項錯雜シ且事體重大ナルヲ以テ、先ツ査定ノ方針ヲ定ムルコト我議院ノ慣例ニシテ、之カ爲メニハ總會ヲ開キテ大體ノ質問ヲナシ査定ノ方針ヲ決定ス。

(3) 各、科、ノ、審、查、 豫算委員會ノ各科ニ於テハ、豫算案各部ノ審査ヲナス。審査會議ノ順序ハ、當局國務大臣又ハ政府委員ノ大體ノ説明ニ始マリ、質問討論ヲ經テ表決ニ附ス。分科會ノ審査ニハ期限ヲ附シテ審査セシムルコトアリ。豫算各分科ノ審査終リタルトキハ、主査ヨリ其旨ヲ委員長ニ報告シ、委員長ハ豫算總會議ヲ開ク。

(4) 委、員、總、會、ノ、手、續、 貴族院、豫算案議定細則ニヨレハ、審査ノ順序左ノ如シ。

(i) 歳出ノ部ヨリ始メテ歳入ノ部ニ移ルコト。
(ii) 歳出入ノ審査ハ各項ニ付之ヲ議決シ次ニ其ノ款ノ總額ニ付議決ヲナス

コト。
又衆議院ノ慣例ニ由レハ其順序左ノ如シ

(i) 歳出豫算甲號(經常部臨時部)乙號丙號ヨリ始マリ、順次ニ、各特別會計、豫算
外國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲナスヲ要スルモノ、歳入豫算、豫算條文ニ
移ルヲ常トス。

(ii) 歳出入ノ審査ハ、通常各款ヲ議題トスルヲ例トス。但シ便宜上然ラサルコ
トアリ。

(5) 報告書ノ調製。豫算委員會ニ於テ、豫算ノ審査ヲ終リタルトキハ、報告書ヲ
作り委員長ヨリ之ヲ議長ニ提出ス。我衆議院ノ慣例ニ由レハ、(一)修正ヲナシ
タル點ニハ條文ノ修正書(二)各款項目等ニツキ要求額ト査定額トヲ對照シ
テ款項目金額増減表ヲ作り(三)之ニ審査説明書ヲ附スルモノトス。

第五〇豫算ノ本會議

(1) 委員長報告。委員會ノ審査終ルトキハ、報告書ヲ作り議長ニ提出ス。但シ委
員會ノ決議ニヨリ委員長ハ口述ヲ以テ報告スルコトヲ得。

(2) 少數意見。委員會ニ於テ少數ヲ以テ廢棄セラレタル意見ヲ議院ニ提出セ
ムト欲スル者出席委員三分ノ一ニ及フトキハ、委員長ノ報告ト共ニ其ノ意
見書ヲ提出スルコトヲ得。貴族院規則第四十二條
衆議院規則第五十七條

(3) 議決。豫算ハ、豫算委員會ニ於テ最モ審査ニ議論ヲ重ヌルカ故ニ本會議ニ
オケル議決ハ議論百出スルカ如キコトナク、自然ノ大勢ニ從テ議決セラル
ルモノトス。其議決方法ハ、別ニ法律案ニ於ケル如ク三讀會ヲ經ルヲ要セサ
ルナリ。

第五章 豫算ノ不成立

第一節 豫算不成立ノ原因

第一〇總說

帝國憲法第七十一條ハ豫算不成立ノ原因ニツキ帝國議會ニ於テ豫算ヲ議定セ

豫算本論 豫算協賛論 豫算ノ不成立 豫算不成立ノ原因

ス又ハ豫算成立ニ至ラサルトキハト規定セリ。然レトモ尙漠然トシテ其ノ如何ナル場合ナルカヲ明知スルコトヲ得ス。由テ今茲ニ各場合ニツキテ説明スル所アラントス。

第二、豫算提出前ノ原因

豫算提出前ニオケル豫算不成立ノ原因ト云フ可キモノハ、

(1) 議會成立セス、爲ニ豫算案ヲ提出スルコト能ハサル場合ニ於テハ、或ハ事實上議會ヲ召集スルコト不可能ナル場合モアルヘク、或ハ議員カ召集ニ應セスシテ成立セサル場合モアルヘシ、然レトモ是レ極メテ稀ナリ。

(2) 議會成立セルモ豫算提出前ニ衆議院解散セラレタル場合ハ、往々見ル所ニシテ、二三年前勅語奉答文ニ付テ解散ヲ命セラレタルカ如キハ之ニ屬ス。

第三、豫算提出後ノ原因

是レ最モ普通ノ場合ニシテ、左ノ如シ

(1) 兩院議定前ニ閉會スルカ衆議院解散セラル、場合ハ、是レ他動的不成立ノ原因トモ云フ可キモノナリ。年度開始前ニ豫算ヲ議了スルコト能ハサル場

合モ亦然リ。

(1) 一院カ豫算ヲ否決シタル場合ハ、豫算全部ヲ否決シタルコトヲ稱スルモノニテ、一部ノ修正ハ此中ニ入ラス。

(3) 兩院ノ議決カ協議不調ニ終リタル場合、總テノ議案ハ、兩院ノ議決一致セサルトキハ、同意ヲ求メ、若シ之ニ應セサルトキハ、兩院協議會ヲ開ク可キコトハ、議院法第五十五條ノ規定スル所ナリ。然ルニ兩院協議會ニ於テモ其ノ議終ニ相合ハサルカ、若クハ其決議案ニ對シ兩院中ノ一カ不同意ヲ表スルトキハ、是レ亦豫算不成立ノ一原因トナルナリ。

第四、豫算議定カ法規違反ノ場合

(1) 憲法第六十七條違反ノ場合、即チ政府ノ同意ナクシテ第六十七條所定ノ歳出ヲ廢除刪減シタル場合ニシテ、此場合ニ於テハ、其他ノ歳出ノ場合ト異リ、豫算ハ修正案ノ如クニ存スルヲ得ス、何トナレハ、法規違反ナル故ニサレハトテ、原案ノ如クニ存立スルコトヲ得ス、何トナレハ、議院ノ可決スル所トナラサリシ故ニ由テ止ムヲ得ス豫算全部ヲ不成立トセサルヲ得サルナリ。斯

クノ如ク一部豫算不成立ノ爲ニ全部ノ豫算成立セサル場合ヲ稱シテ豫算ヲ不可分ナリト云フナリ。

唯茲ニ注意スヘキハ、總豫算、特別會計、並ニ追加豫算ハ互ニ獨立シタルモノナルカ故ニ、彼此影響ヲ受ケサルコトナリ。故ニ一方ノ不成立ハ、他ニ對シテ不成立ノ原因トナルコトナキナリ。

(2) 憲法第七十條違反ノ場合、同條ハ、豫算中ニ豫備費ヲ設クヘキコトヲ規定ス。然ルニ全然豫備費ヲ削除スルカ如キハ、違憲ナリト云ハサルヲ得ス。

(3) 會計法違反ノ場合、例之同法第六條ニ違反シテ款項ノ區分ヲ廢止スルカ如キ第七條ニ違反シテ豫備費ヲ議決スルモ、第一第二ノ二者ヲ存置セサルカ如キ、是レナリ。又歳出ノミヲ議定シテ、之ニ對スル歳入ヲ議セサルカ如キモ同法第二條ニ違反スルモノナリ。

(4) 議院法違反ノ場合、即チ議事ノ手續ニ於テ欠クル所アルモノニテ、例之法定期間内ニ委員會ノ審會ヲ終ラサルカ如キハ、嚴密ニ云ヘハ違法ナリト云ハサル可ラス。我國ニテハ此例ニ反シタルモノアリ、第一議會ニ於ケル衆議院ハ即チ是レナリ。

第五〇結論

以上不成立ノ場合ノ外ニ、豫算ハ君主ノ裁可ニ由テ完全ニ成立スルモノナルカ故ニ、君主ノ裁可ヲ得サル場合ハ、豫算不成立ノ最モ著大ナル場合ト云ハサルヲ得ス。然レトモ斯クノ如キハ事實上殆ント絶無ナルコトニシテ、茲ニ舉クルノ要ナシ。故ニ豫算不成立ノ原因ハ、以上ノ場合ニ限定スルモ不可ナキヲ信スルナリ。

第二節 豫算不成立ノ結果

第一〇〇 李國ニ於ケル實例

李漏西ノ先帝ウイールム第一世ノ偉蹟ハ、人ノ知ル如クナルカ、其ノ攝政ノ位ニ在ルノ日、既ニ兵備擴張ヲ以テ第一ノ目的トナシ而シテ即位ノ後ニ至リテハ、一層此ノ目的ノ爲ニ盡瘁セラレタリ。之カ爲メ議會ト衝突スルコト頻リニシテホーヘンローヘ侯ノ新内閣トナリ、更ニビスマルクノ之ニ代ルヲ見ルニ及ヘリ。ビスマルク曠世英雄ノ資ヲ以テ此任ニ當ルヤ、益皇帝ヲ助ケテ軍備擴張ノ事ニ全カヲ注キ、李漏西國民タルモノハ祖國ノ爲ニ盡スノ義務アリトナシ、以テ豫算ノ

通過ヲ計レリ。然ルニ當時ノ議會ハ、一致シテ之ニ反對シ。豫算議定權ヲ以テ國家一切ノ歳入歳出ヲ許否スル絶對無限ノ權利ナリトシ、以テ政府ノ軍備擴張ヲ沮メリ。

千八百六十三年、議會開會ノ始メニ當リ、政府ハ左ノ勅語ヲ以テ政府ノ措置ヲ述ヘタリ。

千八百六十二年度ノ豫算ハ不幸ニシテ遂ニ成立ニ至ラス。然レトモ政府ハ國家ノ政務ヲ繼行スル爲メ、又現行ノ制度ヲ維持シ一國ノ幸福ヲ増進スル爲メ必要缺ク可カラサル經費ノ支出ヲ停止ス可キニアラス。政府ハ決算結了ノ後兩院ニ向テ右支出ノ承諾ヲ求ムヘシ。

又首相ビスマルクハ、彼ノ有名ナル法案ノ答辯ニ於テ述ヘテ曰ク「凡ソ法律ハ君主及兩議院ノ同意ナクシテ成立スヘカラス。故ニ豫算法モ亦必ス此三者ノ合意アルヲ要ス。若シ三者ノ中何レカ絶對的ノ理論ヲ以テ自己ノ意見ヲ貫徹セント欲セハ、和衷協同ハ忽チ變シテ衝突トナリ、更ニ一變シテ權力問題トナリ、現時權カヲ掌握スル者ハ其ノ意見ヲ實行スルニ至ラン、何トナレハ國家ハ須臾モ活動

ヲ停止スヘカラサレハナリ。此ノ點ニ於テ一ノ空缺アルハ、今日始メテ發見セラレタルニアラス。斯クノ如キ場合ノ生スヘシトハ、憲法改正ノ當時ニ在リテモ議論アリタル所ニシテ、唯今日ニ至テ始メテ其ノ實例ヲ生シタルノミ云々」ト。次テ大藏大臣ホン、ボーデンシユイングハ、憲法第九十九條ニ左ノ一項ヲ追加セント試ミタリ。

歳計豫算法ノ成立ニ必要ナル國王及國會兩院ノ合意成ラサルトキハ、後日豫算ノ成立ニ至ルマテ法律ヲ以テ定メラレタル最近ノ豫算其效力ヲ有スルモノトス、但臨時費ハ、國家ノ義務ニ屬スルモノヲ除クノ外、法律ヲ以テ定メラレタル最近ノ豫算ニ於テ既ニ豫期シタル所ノ目的ニ限り、且其豫算ニ於テ承諾ヲ得タル金額ノ範圍内ニ於テ、前項期間中ノ支出スルコトヲ得然ルニ、下院ニ於テハ全會一致ヲ以テ否決シ、且附スルニ左ノ如キ過激ナル決議ヲ以テセリ。

政府ノ提出ニ係ル千八百六十三年十二月十一日ノ法律案ハ憲法第九十九條ノ追加ニアラスシテ、反テ全然之ヲ破却セントスルモノナリ。

斯クノ如クニシテ、字漏西ニテハ千八百六十二年ヨリ六十六年ニ至ル迄下院ノ同意ナクシテ豫算ヲ執行スルヲ見ルニ至リ、同年ニ至リ漸ク和解ヲナシ、事後承諾ヲナシテ紛議ヲ一掃スルニ至レリ。

第二、我國ノ規定

豫算ハ其效力一年度限りノモノナルカ故ニ、豫算不成立ノ場合ニ於テ憲法上何等ノ規定ナキトキハ紛議ノ源トナルコト既ニ前例ノ示ス所ナリ。故ニ我憲法ハ第七十一條ニ於テ規定シテ曰ク

帝國議會ニ於テ豫算ヲ議定セス、又ハ豫算成立ニ至ラサルトキハ、政府ハ前年度ハ豫算ヲ施行スヘシ。

之ヲ以テ、設令法律上必要ナル費用ト雖モ、前年度ノ豫算議定後ニ生シテ前年度ノ豫算ニ掲ケサルモノハ、一切支出スルコトヲ得ス。唯豫算外國庫負擔トナル契約ハ豫算不成立ヲ名トシテ履行セサルコト能ハサルカ故ニ、後年度分ニ對シテ之ヲ支出スルコトヲ得ヘシ。繼續費ニシテ年割額ヲ定メタルモノ亦同シ。此憲法ノ規定ハ外國ニ於テハ西班牙、索遜等ニ存スルヲ見ル。

第三、前年度豫算施行ノ期間

以上ノ如ク前年度ノ豫算ヲ施行スレハ、豫算不成立ニ對スル不便ヲ除クヲ得ヘシ。唯茲ニ問題トナルハ、其施行期間ハ一年度ニ亘ラサル可ラサルカ、或ハ半途ニシテ之ヲ止メ更ニ議會ノ議定シタル豫算ヲ施行スルコトヲ得ルカニ在リ。予輩ノ信スル所ニ依レハ、前年度ノ豫算施行ハ其ノ豫算カ前年度ノ豫算トシテ、後年度ニ對シテ效力ヲ有スルニアラスシテ、前年度ノ豫算ハ憲法ノ條規ニヨリ後年度ハ豫算トシテ、效力ヲ有スルモノナリ。從テ其ノ效果ハ一年度ニ及フモノニシテ、中途ニシテ變更ス可カラサルモノト解釋ス。但シ追加豫算ヲ提出シテ之ヲ補足スルハ、何等ノ差支ナキコトハ論スル迄モナシ。

第六章 豫算協賛ニ關スル注意

第一節 議員ノ心得

第一、總說

豫算ノ協賛ハ、議會權能中ノ最モ顯著ナルモノニシテ、上ハ君主ニ對シ下ハ國民

ニ對シ重大ナル責任ヲ荷フモノナリ。故ニ其ノ協賛ハ慎重審議ヲ盡サ、ル可カ
ラス。是レ特ニ一章ヲ設ケテ之ヲ論スル所以ニシテ、本節ニ於テハ各議員ニ對ス
ル心得ヲ説クヘシ。

第二〇公平ノ誠意

豫算ハ國家全局ノ施設ニ對シテ其ノ影響スル所頗ル大ナルカ故ニ、常ニ公平ノ
考ヲ以テ之ニ向ハサル可カラス。單ニ一時ノ政略上若クハ黨派ノ利害關係上、反
覆スルカ如キハ最モ戒メサル可カラス。

從テ彼ノ豫算委員ノ如キハ、其ノ選定上最モ注意シテ財政上ノ學識經驗ヲ兼備
シ、併セテ公平ニシテ憂國ノ誠意アルモノヲ採ラサル可ラス。單ニ黨派上ノ權力
分配問題ニノミ配慮スルハ戒メサル可ラス。

第三〇遠大ノ眼光

國家ノ財政ハ其規模廣大ニシテ、其着眼ハ遠大ヲ期スルニ在リ。從テ目前ノ小利
害若クハ一地方ノ小問題ニ踴躍スルカ如キハ擯斥セサル可カラス。從テ偏ニ消
極主義ヲ採リテ豫算ノ緊縮ヲノミ圖ラントスルモノ、若クハ輕躁ニシテ定見ナ

ク妄リニ永遠ニ效果ヲ見ル可キ事業ニ對シテ攻撃ヲ試ムルモノ、或ハ自家ノ職
業若クハ境遇ニノミ着眼シテ廣ク國家ノ大計ヲ打算スル能ハサル徒ノ如キハ、
以テ豫算協賛ノ大任ノ負荷ニ堪エサルモノナリ。

第四〇大體ノ見識

豫算ハ卷帙浩濶ニシテ到底短日月ノ能ク盡ク可キニアラス、從テ議員タルモノ
ハ大體ニ通スルノ見識ヲ有シ、最モ重要ナル點ニ着眼スルノ能力ナカル可カラ
ス。若シ眼光豆ノ如ク、徒ニ小問題ニノミ踴躍シテ、却テ大體ニ於テ失フ所アルカ
如キハ、戒メサル可ラス。之ニ對シテ、學國ノ豫算討議法ハ最モ要領ヲ得タリ。即チ
同國ニ於テハ、豫算委員會ハ單ニ豫算ノ一部分ナル重要ノ點ヲノミ精細ニ調査
討議スルコト、シ、而シテ其他ハ皆政府提出ノ通りニ議會ニ報告スルノミナリ。

第二一節 制度ノ得失

第一〇豫算委員會ノ組織

豫算委員會ノ組織ハ、統一的豫算討議ノ方法ニ依ル可キハ云フ迄モナシ。サレト

モ、英國式ニ依リテ全院委員會ヲ開ク可キヤ、大陸式ニ依リテ制限委員會ヲ設ク可キヤハ、未定ノ問題ニ屬ス。我輩ヲ以テ見レハ、大陸式ハ議論ノ紛起ヲ防クニ於テ英國式ニ勝リ、シカモ各科目ノ分業方法ニ依リ、優秀ナル人物ヲ選定シテ之ニ充ツルトキハ、其效果モ亦英國式ニ拔ツルモノアルヘシ。畢竟英國式カ良好ナル成績ヲ呈スルハ、其沿革的理由ニ依ルモノニシテ、他國ノ模倣シテ之ト同一ナル結果ヲ生スヘキモノニアラス。現ニ伊太利ノ如キハ英國式ニ倣ヒシモ、満足ノ結果ヲ見スト云フ。

第二、法律案トノ關係

豫算ハ法律案ノ未タ提出セサルモノ、若クハ提出スルモ議了セサルモノヲ基トシテ、計算セル費目ヲ包含スルコトアリ。而シテ之ニ付テ議論ヲ生スルハ往々見ル所ニシテ、現ニ我國ノ如キハ、每期之ニ對スル紛議ヲ見ル。豫算案ト法律案トハ別物ニシテ、豫算案ニ可決シテ法律案ニ否決スルハ、理論上何等ノ差支ナキ所ナレトモ、妄リニ辭ヲ豫算案ノ可決ニ藉リテ、法律案ノ可決ヲ強フルカ如キハ、弊害ノ甚シキモノナリ。故ニ此弊害ヲ避ケント欲セハ、法律案ニシテ豫算ニ影響ヲ及

ホ、可キモノハ、豫算委員會ニ其内容ヲ明示シ、委員會ハ之ニ對シテ一々取捨ノ方針ヲ決定シ、然ル後ニ豫算ノ審査ニ入ルハ外ナシ。然レトモ他ノ極端ニ走リ、彼ノ佛國ノ制度ノ如ク、豫算法中ニ法律案ヲ混同シテ議定ヲ求ムルカ如キモ、豫算事項ヲ過度ニ膨大ニスルモノトシテ、吾人ノ賛成セサル所ナリトス。

第三、豫算増加ノ弊

豫算増加ノ動議ハ我國ノ慣例上少シモ之ヲ制限セサルニ似タリ。然レトモ吾人ノ見ル所ヲ以テスレハ、此慣例ハ不可ナリ。元來豫算ノ編製權ハ政府ニ專屬シテ議會ノ有スル所ハ所謂行政監督權ノミ。今若シ議會ニシテ自由ニ豫算ヲ増加新設スルコトヲ得ルトセハ、恰モ議會カ豫算編製權ヲ有スルト同一ノ結果トナルヘシ。是レ豈憲法上ノ本旨ナランヤ。故ニ吾人ハ信ス、議會ハ行政監督權ノ結果トシテ、豫算ヲ議定シ、其費額ヲ刪減スルヲ得ルハミ。從テ各箇ノ議員ハ豫算費額刪減ノ動議ヲ發スルヲ得ルモ増加ノ動議ヲ發スルコト能ハスト。而シテ實際上ノ利害ニ照セハ此原則ノ必要ナルヲ感スヘシ。

歐洲諸國中、最モ此弊ニ苦ムモノヲ佛國トス。試ミニルロア、ボリュ一氏若クハレオ

ン、セイ氏ノ著書ヲ繕カハ、如何ニ佛國ノ財政カ議員ノ「分取主義」ノ爲メ攪亂セラレシカラ知ルニ足ル。英國ニ於テモ十七年來行政費ノ膨脹ハ二億萬ニ及ヒ、シカモ其過半ハ議員ノ膨脹ニ基ケリト云フ。四月二十一日財政演說、議院ノ模範ヲ以テ稱セラル、英國ニ於テスラ此ノ如シ、深ク鑑ミサル可ケンヤ。

之ヲ以テ、外國ニテハ往々之ニ關スル制限規定ヲ設クルモノアリ。瓦敦堡憲法ニ曰ク、租稅ノ創設、起債、豫算ノ編制又ハ豫算外ニ歲出定額ヲ設クル事ニ關スル法律ノ提出權ハ、國王ニ專屬ス。議院ハ政府ノ定メタル豫算科目ノ金額ヲ増加スルコトヲ得ス。第十二條ト。佛國ニテ於モ近頃之ニ類スル規定ヲ設ケタルヲ見ル。我國ニ於テモ亦同様ナル規定ヲ設クルノ必要アルヘシ。

第四、表決ノ方法。

豫算ノ表決方法ニ二種アリ、一ヲ全體表決法ト云ヒ。一ヲ明細表決法ト云フ。全體表決法トハ議會ハ豫算ヲ變更セシテ其ノ儘ニ承認スルカ、又ハ絕對ニ之ヲ棄却スルカ、二者其一ヲ選フコトヲ云フ。明細表決法トハ豫算ヲ科目ニ分類シ、各科目ニ付テ可否又ハ修正ヲ定ムルモノナリ。

明細表決
法ノ程度
問題

我國

佛國

之ヲ歴史的ニ見ルニ、古代ハ全體表決法ヲ用ヒタルモノアルモ、現今ニ於テハ唯希臘國ノ之ヲ用フルアルノミ、而シテ其得失ノ如キハ論スル迄モナシ。

唯現今ニ於テモ問題トナレルハ、明細表決法ノ程度問題ナリ。即チ表決科目ハ之ヲ寬ニスヘキヤ、若クハ嚴ニスヘキヤニ在リ。若シ之ヲ寬大ニ失センカ、議會ノ協贊ハ有名無實ニシテ形式的タルニ止マルヘシ。又之ヲ細密ニ過キンカ、行政上必要ナル自由活動ノ餘地ヲ存セサルニ至ルヘキナリ。此等ノ理由ヨリシテ、表決ノ程度問題ハ常ニ政府ト議會トノ争フ所タリ。

我國ニ於テハ、表決科目ハ即チ項以上ニシテ、目以下ハ與カラス。而シテ或ル部分ニ付テハ、我國ニテモ款項ノ分類尙精密ヲ要スルモノアルカ如シ。

佛國ノ沿革ハ、最モ右兩法ノ關係ヲ明ニスルモノナリ。革命時代及ヒナポレオン一世時代ハ、全體表決法ニ由レリ。然ルニ恢復時代及第二帝政時代ニハ、豫算ヲ各省毎ニ協贊スルコト、ナリ。降テナポレオン三世時代ニハ更ニ豫算ヲ款項ニ大分シテ表決ニ附セリ。而シテ其後第三共和政體ノ治下ニ於テハ、終ニ豫算細分表決ノ主義ニ則リ、千八百七十七年以來、歲出表決科目三百五十トナリ、今日ニ至リ

駁論

滿スニ足ラサルコトヲ證明セサル可カラス、是レ即チ豫算ノ起源ナリ。然ルニ租稅ノ承諾ハ元來法律ノ協賛ト全ク其性質ヲ異ニシ、議會ノ意思ノミニテ成立スルモノナリ。租稅承諾ノ性質既ニ斯クノ如シトセハ之レニ由リテ發達セル豫算制度カ亦法律ノ協賛ト趣キヲ異ニシ、特ニ君主ノ裁可ヲ要セス、議會ノ合意ノミニ由リテ成立スルヤ疑ヲ要セサル所ナリ。帝國憲法カ特ニ豫算ニ付テ君主ノ裁可ヲ要スルコトヲ規定セサルハ、以上ノ沿革ニ照シテ明了ナリト。然レトモ吾人ノ見ル所ヲ以テスレハ、凡テ事物ノ沿革ハ悉ク現今ノ法制ト一致スルモノト云フ可ラス。故ニ豫算制度ノ發達ヲ以テ直ニ裁可ヲ要セサルモノトスルハ不可ナリ。今假ニ一步ヲ讓リテ、泰西諸國ニ於テハ然リトスルモ、之ヲ以テ日本帝國ニ適用スルノ不當ナルハ、多言ヲ要セサルナリ。何トナレハ、租稅承諾權ノ如キハ民主國ノ下ニアリテノミ想像サレ得キ思想ニシテ、我國ノ如キ純粹ナル君主國體ノ國家ニハ何等ノ關係ナケレハナリ。

第三〇〇憲法第六十七條上ノ不裁可論

其要旨ニ曰ク、憲法六十七條ハ、或ル種ノ歲出ハ政府ノ同意ナクシテ帝國議會之

駁論

ヲ廢除削減スルヲ得サルコトヲ規定ス。蓋シ政府ハ天皇陛下ノ政府ナリ、國務大臣ハ天皇陛下ノ委任ニ由ルニアラサレハ政府ノ同意ヲ表スルヲ得可カラス。若シ裁可ニ由リテ君主豫算ノ全部ニ同意スルニ非サレハ、豫算成立ニ至ラストセハ、第六十七條ハ何ノ必要アリテ特ニ一部ノ歲出ニ政府ノ同意ヲ要スルコトヲ規定シタルカ、憲法上六十七條ノ規定アルハ、即チ憲法ハ豫算ノ成立ニ天皇ノ裁可ヲ要セストスルモノナリト。

然レトモ、君主ト政府トヲ以テ論者ノ云フカ如ク、同義ニ解スルハ吾人ノ贊成セサル所ニシテ、現ニ憲法上ニモ議會ノ建白カ天皇ニハ上奏ト云ヒ、政府ニハ建議ト云フヲ以テモ知ルヘシ。或ハ一步ヲ讓リテ、政府ノ同意ハ必ラス、君主ノ裁定ニ由ルモノナリトスルモ、未タ以テ憲法六十七條ヲ以テ不裁可ノ論據トナスコトヲ得サル可シ、何トナレハ、豫算ハ其成立又ハ不成立ニ付テハ不可分ナルコトハ、現ニ「豫算不成立」ノ章下ニ説明セル如クニシテ、從テ君主ノ裁可ト雖モ一部ヲ裁可シテ一部ハ原案又ハ前年度ノ豫算ヲ施行スルコトヲ得ス。從テ、君主不裁可ノ結果ハ全部ニ亘ル前年度豫算ノ施行ノミ、即チ憲法六十七條ノ趣旨ハ或ル一部

ノ歳出ニ付テ同意ナルカ爲ニ、全部ノ豫算ノ不成立ヲ見ルカ如キ不幸ナカラシメンカ爲メナリ。之ヲ以テ、豫算不裁可ノ論據トスルカ如キハ、牽強ノ説ト云ハサルヲ得ス。

第四〇〇憲法第九條上ノ不裁可論

其要旨ニ曰ク、憲法第九條ハ天皇ハ必要ナル命令ヲ發シ又ハ發セシムルコトヲ規定ス。即チ命令中ニハ君主直接ニ發セシテ行政官ニ發セシムルモノアルヲ認メタリ。故ニ若シ豫算ニシテ此ノ種ノ命令ニ屬スルトキハ、閣令省令等ト均シク君主ノ裁可ヲ要セサルコト、ナルヘシ。而シテ豫算ハ必ス君主ノ名ヲ以テ發スヘシ、又ハ行政官ノ名ヲ以テ發スヘシト云フ一定ノ法規アルコトナシ、故ニ豫算ヲ裁可スルハ不法ニアラスト雖モ、之ヲ以テ成立ノ要件トナスノ要ナキナリ。此説ハ前説ヨリモ多少寛和スル所アルモ、尙之ニ賛スルコト能ハス。何トナレハ論者ハ憲法ニ正條ナキヲ以テ、豫算ハ行政官ノ一片ノ命令ヲ以テモ發スコトヲ得ト云フト雖モ、豫算ハ一國ノ最重要ナル政務ニシテ之ヲ以テ一箇ノ片々タル法律案ヨリモ輕シト云フカ如キハ、常識ニ乏シキ不通論ナルコト言ヲ俟タサ

ル所ナレハナリ。加之憲法第七十條財政上ノ緊急處分ノ場合ト比較スルモ同條ハ政府カ帝國議會ヲ召集スルコト能ハサルヲ以テ、財政上ノ處分ヲナスニハ勅令ニ依リテ爲スコトヲ要シ、次ノ會期ニ於テ議會ニ提出シテ承諾ヲ得サル可カラス。然ラハ之ト同種ニシテ、且之ヨリモ事體重大ナル總豫算カ、君主ノ裁可ヲ俟ツ可キモノナルコト更ニ多言ヲ要セサルナリ。

第五〇〇結論

以上論述セルカ如ク、君主ノ不裁可論ハ我國ニ於テハ實際上ニモ理論上ニモ採用スヘカラサルモノニシテ、君主カ統治權ヲ總攬スル以上ハ、當然豫算ノ裁可權ヲ有スルモノナリ。論者或ハ憲法上明文ナキコトヲ云フト雖モ、憲法第六十四條ハ國家ノ歳出入ハ毎年豫算ヲ以テ帝國議會ノ協賛ヲ經ヘシト規定セルニアラスヤ。而シテ協賛ナル語カ裁可ニ相對立スヘキモノニシテ、決定的ノ性質ヲ有セサルヤ論ナシ。憲法第六十四條ハ、即チ明文上豫算ニ裁可アルコトヲ規定セルモノナリ。

第一章 豫算ノ公布

第一、豫算ハ公布ヲ要スルヤ

豫算ノ裁可ヲ要スルコトハ、前章ニ説ク所ノ如シ。然ラハ豫算ハ公布ヲ要スルヤト云フニ、單ニ憲法ノ正條ノミニ依ルトキハ必シモ公布ヲ要セサルカ如シ。又豫算ノ性質ヨリ云フモ、法律カ一般臣民ノ遵由スヘキ準則ヲ規定シタルニ反シ、豫算ハ單ニ行政部内ニ於テ遵奉スヘキ規定ヲ定メタルモノナリ。故ニ必ス之ヲ公布セサル可ラサルノ必要モナキナリ。

然レトモ、單純ナル理論ヲ離レ之レヲ豫算發生ノ沿革ニ照シテ考フレハ、文明國ノ通義トシテ公布ノ必要ナルコト論ヲ俟タス。各國カ豫算制度ヲ採リテ款項分科ノ法ニ由リ、議會ノ議ニ附スル所以ハ、實ニ一國ノ歲計豫算ハ的確ナル表示的ノモノニシテ、行政官ノ非違越權ノ處置ヲ容レサルコトヲ明ニスルニアレハナリ。

第二、豫算公布ノ形式

我國現行ノ形式左ノ如シ。

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル明治三十八年度歳入歳出總豫算各特別會計歳入歳出豫算若シクテ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年 月 日

内閣總理大臣 爵 氏 名
大藏大臣 爵 氏 名

豫算

明治三十八年度歳入額ヲ、、、、、歳出額ヲ、、、、、ト定ム其款項ノ全額ハ別冊歳入歳出豫算ニ據ル可シ

第三、豫算外國庫負擔トナル契約公布ノ形式

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル豫算外國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲ爲スヲ要スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十八年 月 日

内閣總理大臣 爵 氏 名
海軍大臣 爵 氏 名
大藏大臣 爵 氏 名

豫算本論 豫算裁可論 豫算ノ裁可 豫算ノ公布

豫算外國庫ノ負擔トナル契約ヲナスヲ要スル件
海軍工廠資金ニ於テ材料物品費百八拾万圓ヲ限リ明治三十九年度ニ於テ國庫ノ負擔トナルヘ
キ契約ヲ明治三十八年度ニ於テ結フコトヲ得

第四編 豫算後論

第一部 豫算施行論

第一章 國庫

第一節 國庫ノ組織

豫算ノ成立ハ前編ニ述フル如ク、裁可公布ヲ以テ了レルモノトス。而シテ其ノ豫算カ如何ニ運用セラレ、カハ、次ニ説明ヲ要スル所ナリ。唯豫算ノ施行ハ、本來ノ性質上、財務行政若クハ會計法ニ屬スルモノナルカ故ニ、茲ニハ其ノ大要ヲ説クヘシ。

第一〇〇總說

豫算施行ノコトヲ論スルニハ、先ツ國庫ヨリ説カサル可カラス。他ナシ、國庫ハ一國收支ノ基本ヲ成スモノナレハナリ。國庫ノ沿革ヲ見ルニ、古代ヨリ左ノ如キ順序ヲ以テ、發達スルヲ見ル。

(1) 官廳金庫制

(2) 國家金庫制

(3) 預金組織制

以下、順次之ヲ略説スヘシ。

第二、官廳金庫制

國家ノ官廳カ箇々別々ニ自己ノ金庫ヲ有スルモノニシテ、各官廳ハ其ノ收入ヲ以テ自己ノ金庫ニ收納シ、支出ヲ要スルコトアレハ、自己ノ金庫ヨリ支拂ヲナス。而シテ其ノ殘額ノミ、中央政府ノ金庫ニ拂込マル、モノナリ。此制度ハ、沿革上第一次ニ位スルモノニシテ、(1) 一國ノ財政ハ、煩雜ニ流レテ統一ヲ欠キ、(2) 各官廳金員浪費ノ虞レアルノミナラス、(3) 保管吏往々私曲ヲ遂クルノ嫌ヒアリ、(4) 且之カ爲ニ多數ノ官吏ヲ要シ、經費モ從テ多額ニ上ラサルヲ得ス。要之、官廳金庫制ハ、一國ノ財政上幼稚ノ時期ニアルモノナリ。

第三、國家金庫制

以上ノ如キ欠點ヲ感スルヨリシテ、各國皆國家金庫ノ制ヲ採ルニ至レリ。國家金

庫制トハ即チ統一的、的、金庫ノ謂ニシテ、一國行政ノ全體ニ對シテ、唯一ノ金庫ヲ有セシムルモノナリ。即チ國家ノ收入ハ、其ノ何レノ官廳ニ屬スルモノヲ問ハス、總テ一ノ國家金庫ニ收納セラレ、其ノ支出ハ更ニ國家金庫ヨリ支拂ハル、モノナリ。此ノ制度ニ由ルトキハ、官廳金庫ニ於ケル凡テノ弊害ヲ一掃スルコトヲ得ヘシ。

國家金庫制ニ二種アリ、一ヲ固有金庫制トシ、一ヲ委托金庫制トス。固有金庫制トハ、國家カ自ラ金庫ヲ設ケ、官吏ヲシテ其ノ支出事務ニ當ラシムルモノヲ云ヒ、委托金庫制トハ、國家ハ自ラ金庫ヲ設ケス、之レヲ中央銀行ニ委托シテ、其ノ事務ヲ採ラシムルモノヲ云フ。蓋シ銀行業者ハ、此種ノ事務ニ練熟シテ敏快正確ナルコト官吏ヲシテ取扱ハシムル比ニアラサレハナリ。但シ、銀行固有ノ事務ト國家金庫取扱事務トハ、截然トシテ區別セシムルヤ勿論ナリトス。

第四、預金組織

預金組織ハ、國庫組織中最モ進歩發達シタルモノニシテ、此制度ニ於テハ、政府ノ收入ハ凡テ之ヲ中央銀行ニ預ケ入レテ、銀行ノ預金トシ、政府ニ支出ヲ要スルコ

委託國家
金庫制
ト

トアルトキハ、此ノ預金ニ宛テ振出シタル切手ヲ以テ支辨スルモノナリ。預金組
織ハ現今英國ニ於テ行ハル、所ニシテ、英蘭銀行ハ其ノ預金ニ應スルモノトス。
前述セル委託ニ依ル國家金庫制ト預金組織トノ異ル所ハ、前者ハ銀行ノ資金
ト國庫金トハ明ニ之ヲ分割シテ取扱フモノナルニ反シ、後者ハ兩者全ク銀行ノ
資金トシテ取扱フニ在リ。故ニ後者ハ通貨ヲシテ長ク國庫中ニ藏セシメス、能ク
之ヲ活用シテ、經濟界ニ裨益ヲ與フル點ニ於テ、前者ニ勝ルモノト云ハサル可カ
ラス。然レトモ此ノ制度ノ存在ヲ見シニハ、中央銀行ノ發達十分ニシテ、遺憾ナキ
度ニ進マサル可カラス。

第二節 我國ノ金庫制度

第一總說

現時ノ制
度

我國現時ノ國庫制度ハ、即チ國家金庫制ニシテ全國一系ノ國庫ニ依リテ取扱ハ
ル。會計法第四條ニ曰ク、

各官廳ニ於テハ、法律勅令ヲ以テ規定シタルモノ外、特別ノ資金ヲ有スルコ

トヲ得ス。

同第十二條第二項ニ曰ク、

國務大臣ハ、其ノ所管ニ屬スル收入ヲ國庫ニ納ムヘシ、直ニ之ヲ使用スルコ
トヲ得ス。

同第十三條ニ曰ク、

國務大臣ハ、其ノ所管定額ヲ使用スル爲ニ、國庫ニ向ヒテ仕拂命令ヲ發スヘ
シ。但シ別ニ定ムル所ノ規程ニ從ヒ、他ノ官吏ニ委任シテ仕拂命令ヲ發セシ
ムルコトヲ得。

過去ノ沿
革

而シテ我國ニテハ、以前ニ於テハ固有金庫制ヲ採リ、大藏省中ニ出納局、金庫局ノ
設ケアリテ、國庫金ノ取扱ヲナセシカ。明治二十三年四月一日ヨリ、會計法ヲ實施
スルニ及ヒ委託金庫制ヲ採用スルニ至レリ。會計法第三十一條ニ曰ク、

政府ハ、國庫金ノ取扱ヲ日本銀行ニ命スルコトヲ得。

而シテ、是レヨリ、日本銀行部内ニ營業局ノ外ニ國庫局ヲ設置シ、國庫金ノ取扱ヲ
ナスコト、ナレリ。

一進歩

尙茲ニ一言スルハ、我國ハ未タ預金組織ノ制度ヲ採ルニ至ラスト雖モ、銀行資金ト國庫金トノ間ニ一條ノ通路ヲ設クルニ至リシコト、是レナリ。即チ明治二十七年六月、法律第十六號國庫金出納上、一時貸借ニ關スル件ハ、政府ハ日本銀行ト一會計年度間、貸借勘定ヲ爲スヲ得ルコトヲ規定セリ。是レ實ニ預金組織ニ向テ一歩ヲ進メタルモノト云フヘシ。

第二、金庫ノ組織

我國ノ金庫組織ハ、金庫規則明治二十二年勅令第百二十六號ノ定ムル所ニシテ同規則ニ依レハ

金庫ヲ分テ左ノ三種トス。

- (1) 中央金庫 東京ニ置キ、各地ノ本金庫又ハ本金庫ヲ置カサル地方ノ支金庫ヲ統轄ス。
- (2) 本金庫 ハ、之ヲ地方ニ置ク。其ノ位置及ヒ出納區域ハ、大藏大臣ノ定ムル所タリ。本金庫ハ、中央金庫ノ下ニ在リテ支金庫ヲ總轄スルモノトス。
- (3) 支金庫 ハ、本金庫ノ下ニ在リテ現金ヲ保管出納スル所ニシテ、各地方ニ之ヲオク。其位置及ヒ出納區域ハ、大藏大臣ノ定ムル所タリ。

以上三種金庫ノ現金ノ保管出納ハ日本銀行ヲシテ之ヲ取扱ハシメ、大藏大臣之ヲ管理ス。日本銀行ハ本金庫、支金庫ノ現金ノ保管出納ヲ取扱フ爲メ、各地ニ其ノ支店、出張店又ハ代理店ヲ設置シ、日本銀行總裁ハ金庫出納役トシテ一切ノ責任ヲ負擔シ、支店長、出張店長又ハ代理店長ハ金庫出納役ノ代理人トシテ其ノ事務ヲ分擔スルモノトス。大藏大臣ハ、何時ニテモ検査官吏ヲ派出シ、金庫ノ金櫃、帳簿ヲ検査スルコトヲ得ヘシ。

第三、金庫出納事務

金庫ノ出納事務ハ、金庫出納事務規程明治二十六年大藏省訓令第三十九條ノ定ムル所ニシテ大要左ノ如シ。

金庫ノ事務ハ、分チテ歳入部、歳出部、特別會計ノ歳入歳出部、雜部、預金部ノ五トス。今茲ニハ、歳入部、歳出部ノ二者ニツキテ述フヘシ。金庫ハ、左ノ場合ニ國家ノ歳入ヲ收納スルモノトス。

- (1) 納稅告知書ヲ以テ納付スル場合
- (2) 送付書ヲ以テ納付スル場合

(3) 納付書ヲ以テ納付スル場合
 (4) 納入告知書ヲ以テ納付スル場合
 (5) 現金拂込證ヲ以テ納付スル場合
 (6) 監守證ヲ以テ納付スル場合

前三者ハ租稅收納ノ場合ニシテ第一ハ箇人カ直接ニ金庫ニ納付スル場合第二ハ市町村カ領收シタル稅金ヲ納付スル場合第三ハ納期後滯納處分ノ前後ニ稅金ヲ納付スル場合租稅外ノ場ナリ第四ハ箇人カ租稅外ノ收納ヲ直接ニ金庫ニ納付スル場合第五ハ收入官吏カ直納スル場合第六ハ金庫ノ設ケナキ地方ノ收入官吏カ金庫ニ送付スル場合ヲ云フモノトス

歳出部ハ第一ニ大藏大臣ヨリ仕拂豫算等ノ令達第四章ヲ受ケタルトキハ其ノ金額ヲ支出簿ニ登記シオキ其ノ登記後支拂命令官ノ支拂命令書ニヨリテ支拂ヲナスモノトス支拂命令ニハ左ノ三種アリ

- (1) 普通ノ支拂命令
- (2) 集合支拂命令

(3) 裏書アル支拂命令

第一ノ支拂命令ハ債主カ一人ナル場合第二ノ集合支拂命令ハ債主數人ナル場合第三ノ裏書支拂命令ハ金庫所在地以外ニ於テ仕拂ヲ要スル裏書アルモノナリ第一ノ場合ニハ支拂命令ハ支拂命令官ヨリ直接ニ債主ニ交付セラレ別ニ金庫ニ對シテハ案内支拂命令ヲ發ス第二及第三ノ場合ニハ其支拂命令ハ凡テ金庫ニ向テ發セラルモノニシテ債主ハ唯金庫ニ於テ受取ルヘキ通知ヲ受クルニ止マルモノトス

第二章 豫算施行ノ時期

第一節 會計年度所屬

第一會計年度所屬

會計年度ハ豫算カ效力ヲ生スル時期即チ施行セラル時期ナルコトハ既ニ説明セルカ如シ而シテ實際ニ當リテハ歳入歳出ノ各事實カ果シテ某年度ニ屬スルヤヲ明カニ區分セサル可カラス蓋シ歳入歳出ノ各事實ハ日々其活動ヲ繼續

スルモノナレハナリ。故ニ財政上若クハ豫算施行上第一ニ必要ナルハ、此等各事
實ノ所屬年度ヲ定ムルニ在リト云フ可シ。然ラズンハ、會計年度ノ分割ハ殆ント
何等ノ用ヲナスシテ、豫算ト豫算施行トハ常ニ齟齬スルニ至ルヘキナリ。之ヲ
以テ、我會計規則ニ於テモ、第一條及ヒ第二條ニ之レヲ規定セリ。

第二〇歳入ノ年度所屬

歳入ノ年度所屬ハ、之ヲ一言セハ納付義務ノ確定セル日ヲ以テ定ムルヲ正當ト
ス。然レトモ實際ハ必シモ之ニ依ラス、確定收入ト隨時收入トニ區分シテ論スレ
ハ、左ノ如シ。

(1) 確定收入、即チ納期ノ一定シタル收入ハ、其納期末日ノ屬スル年度トス。是レ
原則ト異ル所ニシテ、即チ地租、所得稅、營業稅、酒造稅等ノ如クニ法令上納付
期限ノ一定セル收入ハ、其納期ノ終リ迄ニ納額告知書ヲ發シタルトキハ、其
納期所屬ノ年度ノ歳入トス。但シ會計規則第三十一條ノ二ニヨリテ、納期所
屬ノ年度ニ於テ納額告知書ヲ發セサルモノハ、總テ納額告知書ヲ發シタル
年度ノ歳入ニ編入スルモノトス。

(2) 隨時收入、即チ法令上ノ一定納期ナク隨時ノ事實ニ由リテ發生スル收入ニ
アリテハ、納額告知書ヲ發シテ收納スルモノト然ラサルモノトアリ。其ノ納
額告知書ヲ發スルモノハ、納額告知書ヲ發シタル日ノ屬スル年度、納額告知
書ヲ發セサルモノハ、領收ヲ爲シタル日ノ屬スル年度トス。例之、各種ノ物品
拂下代ノ如キハ前者ニ屬シ、印紙收入、鐵道賃錢ノ如キハ後者ニ屬ス。

第三〇歳出ノ所屬年度

歳出ノ所屬年度ハ、之ヲ一言セハ支拂義務ノ確定セル日ヲ以テ定ムルヲ以テ正
當トス。然レトモ實際ハ、之ニ由ラス。今各種ノ場合ニ付テ言ヘハ左ノ如シ。

(1) 公債ノ元利、賞勳、年金、恩給、諸祿ノ類ハ、任拂期日ノ屬スル年度トス。是レ亦原
則ト異ル所ニシテ、實際ニ適合セシメンコトヲ主トシタルナリ。

(2) 諸拂戻、缺損補填ハ、其ノ拂戻又ハ補填ノ決定ヲ通達シタル日ノ屬スル年度
トス。

(3) 俸給手數料旅費ノ類ハ、其支給スヘキ事實ノ生シタル時ノ屬スル年度トス。

(4) 廳中雜費、土木建築費其他物件ノ購入代價ノ類ハ、契約ヲ爲シタル日ノ屬ス

ル年度トス。但土木建築費ノ如キ契約ノ數年ニ涉ルコトヲ得ヘキモノハ、契約ニ據リテ定メタル仕拂期日ヲ以テ區分スルモノトス。此ニ注意スヘキハ、契約ヲナシタル日トハ、契約ヲ締結シタル日ト云フ意味ニアラスシテ、契約ヲ履行シタル日ノ意味ニ解スヘシ。然ラスンハ、契約ノ年度ト竣工年度ト異ル場合ニ不都合ヲ生ス可ケレハナリ。

(5) 前各項ニ掲クル類別ニ入ラサル費用ハ、總テ仕拂命令ヲ發シタル日ヲ以テ、年度ノ所屬ヲ定ム。

第二節 出納整理機關

第一、出納整理期間ノ必要

出納整理期間トハ、會計年度内ニ於ケル收支ハ其年度内ニ於テ全ク結了スルコト能ハサルカ故ニ、更ニ收支ノ結了ヲ告ケル迄若干ノ期日ヲ與フルコトヲ云フ。蓋シ豫算ノ效力ヲ及ホス可キ年度ハ、毎年四月一日ニ始マリ、翌年三月三十一日ニ終ルモノナルモ、實際豫算ヲ施行スルニ當リ、之カ結了ヲ告ケルニ年度末ヲ以

テスルハ到底不可能ノコトナレハナリ。例之、歳入ニ付テ云フモ納金猶豫若クハ滯納ノ如キコトアリテ、多少時日ノ猶豫ヲ要スルモノナリ。而シテ我邦ニ於テハ此整理期間ヲ次ノ三階級ニ分ツ。

第二、仕拂命令ノ發行期間

會計規則第四十四條ニ曰ク

各年度ニ屬スル經費ヲ精算シテ仕拂命令ヲ發スルハ、五月三十一日限リトス。

故ニ年度内ノ經費ノ仕拂ハ、其翌年度ノ五月三十一日迄ニ支拂命令ヲ發セサル可カラス。若シ此期間以後ニ支拂命令ヲ發スレハ、其年度ノ支出トシテ見ルコトヲ得サルナリ。

第三、金庫出納期間

會計規則第三條ニ曰ク

毎年度所屬歳入歳出金ヲ金庫ニ於テ出納スルハ、翌年度六月三十日限リトス。故ニ年度内ノ收入支出ハ、其翌年度六月三十日ヲ以テ限リトス。若シ此期限後ニ

出納アルトキハ、恰モ支拂命令期間後ニ於ケルト同シク、目スルニ其年度ノ收入支出トシテ見ルコトヲ得ス。

第四、主計簿締切期間

會計規則第一百九條ニ曰ク

各年度經過後七箇月ノ末日ニ於テ、大藏大臣ハ會計検査官立會ノ上ニテ、大

藏省ニ備ヘタル主計簿ヲ締切ルヘシ。

以上仕拂命令發行並ニ金庫出納ノ期間ヲ經過スルモ、尙該年度ニ關スル會計事務ハ完結セリト云フ可カラス。此等ノ期間經過後若干ノ月日ヲ以テ主計簿ヲ整理シ、茲ニ全ク結了ヲ告ケサル可カラス。是レ即チ主計簿締切期間ナリ、唯茲ニ一言スルハ、會計法第一條第二項ニ

- 一 會計年度所屬ノ歳入歳出ノ出納ニ因ル事務ハ翌年度十一月三十日マテニ悉皆完結スヘシ

トアルニ由リ、一見主計簿締切期間後尙一定ノ期間存在スルカ如シト雖モ、實ハ然ラスシテ主計簿ノ締切ニ由テ一切ノ事務ヲ完結セルモノトス、必竟會計法ニ

十一月三十日トアルハ、明治三十五年勅令第二百號ヲ以テ會計規則第一百九條ヲ訂正シタルカ爲メ不合致ヲ生シタルノミ。唯會計法ニ此規定ヲ存スルモ、實際上ノ運用ニ差支ナキヲ以テ之ニ修正ヲ及サ、ルノミ。

第三節 時效

第一、短期時效ノ必要

箇人間ノ債權關係ニ時效ヲ認ムルノ必要ナルカ如ク、國家會計ノ上ニ於テモ時效ヲ認ムルヲ要ス。而シテ其ノ短期時效ヲ認ムルハ特ニ國家ノ會計上ニ於テ必要ナリトス。蓋シ彼ノ會計年度又ハ出納整理期間ノ如キハ、唯行政官ニ對シ束縛ノ效力ヲ及ホスノミニシテ、國庫ト箇人トノ間ノ債權關係ハ依然トシテ變更スル所ナシ、而シテ、國家ノ會計事務ハ其ノ範圍廣汎ニシテ錯雜スルカ故ニ、之ニ長期ノ時效ヲ有セシムルトキハ、整理上少カラサル煩勞ト經費トヲ要スヘキナリ。是レ短期時效ノ必要ナル所以ナリ。

第二、收支ノ時效

箇人間ノ債權關係ノ時効ハ、民法上普通ノ場合ヲ十箇年トセリ。然ルニ國家ノ會計上ニハ、以上ノ必要アルカ爲ニ、之ヲ短縮シテ五箇年トセリ。會計法第十八條及第十九條ニ曰ク、

政府ノ負債ニシテ、其ノ仕拂フヘキ年度經過後滿五箇年内ニ、債主ヨリ支出ノ請求若ハ仕拂ノ請求ヲ爲サ、ルモノハ、期滿免除トシテ、政府ハ其ノ義務ヲ免ル、モノトス。但シ特別ノ法律ヲ以テ、期滿免除ノ期限ヲ定メタルモノハ、各其ノ定ムル所ニ依ル。

政府ニ納ムヘキ金額ニシテ、其ノ納ムヘキ年度經過後滿五箇年内ニ上納ノ告知ヲ受ケサルモノハ、其ノ義務ヲ免ル、モノトス。但シ、特別ノ法律ヲ以テ、期滿免除ノ期限ヲ定メタルモノハ、各其ノ定ムル所ニ依ル。

茲ニ云フ特別ノ法律トハ、整理公債條例(元金ノ時効十五箇年)關稅法(過誤納請求權ノ時効二箇年)及ヒ民法商法中五年未滿ノ時効ノ規定ノ如キヲ云フ。
第三、時効ノ中斷
時効ノ中斷ハ、前ニ記セル會計規則ニ規定スル所ニシテ

- (1) 政府ノ負債ニ在テハ、債主ヨリ支出ノ請求若クハ仕拂ノ請求。
 - (2) 政府ニ納ムヘキ金額ニ附テハ上納ノ告知。
- トス。茲ニ支出ノ請求トハ、仕拂命令ノ交付ヲ請求スルコトヲ云ヒ、仕拂ノ請求トハ金庫若クハ現金前渡官吏ヨリ現金ノ交付ヲ受クルコトヲ請求スルヲ云フ。

第三章 豫算施行ノ手續

第一節 收入事務

第一、收入機關

收入機關トハ、收入ヲ命令シ若クハ現金ヲ收入スル者ヲ總括シテ云フ。而シテ其ノ收入ヲ命令スル者ト現金ヲ收入スル者トハ、特殊ノ機關ヲ以テ當ラシムルヲ、文明國會計法ノ原則トス。我國モ亦此主義ニ則レルカ故ニ、之ヲ分チテ説明センニ。
命令機關ハ、租稅收入ノ場合ト租稅外收入ノ場合トニ分ル。今之ヲ列舉スレハ左ノ如シ。

(1) 税務署長。是レ即チ收税官吏ニシテ、稅務監督局長ノ監督ノ下ニ在リテ、納稅者ニ對シ納稅告知書ヲ發ス。

(2) 市町村。然ルニ或ル種ノ租稅ニ在リテハ、國家ハ市町村ヲシテ直接收入ノ事ニ當ラシムルコトアリ、國稅徵收法第五條即チ地租、所得稅、營業稅、賣藥稅等トス。此場合ニハ、稅務署長ハ市町村ニ納稅告知書ヲ發シ、市町村ハ更ニ納稅者ニ徵稅傳令書ヲ發スルモノトス。

(3) 各官廳長官。是レ租稅以外ノ收入、即チ手數料、免許料、物品拂下代等ニ於テ見ル所ナリ、而シテ此各官廳ニ於テ、長官ノ命ヲ奉シ收入ノ事務ニ當ル者ヲ收入官吏ト云フ、收入官吏ハ長官ヨリ送付サレタル納入告知書ヲ納人ニ交付スルモノトス。明治二十六年大藏省訓令第四十號諸收入收納取扱規程第五條

次ニ受領機關ハ、前述ノ如ク命令機關ノ發セル命令書ニ依リテ實際現金ヲ受領スル者ニシテ、既ニ第一章ニ說ケルカ如ク金庫ニ拂込マシムルコトトシ日本銀行(又支店出張店)ヲシテ其事務ヲ取扱ハシム。但シ市町村若クハ各官廳長官カ命令機關ナル場合ニ於テハ市町村收入役若クハ收入官吏ハ直接ニ納人ヨリ受領シ之

受領機關

ヲ金庫ニ拂込ムモノトス。但收入官吏ハ、金庫ノ設ナキ運搬通信ノ不便ナル地方ニアルトキハ、之ヲ保管シ大藏大臣ノ指定ニ從フコトヲ得。會計規則第二十七條

第二、收入ノ手續

- (1) 金庫ニ於テ、納人又ハ收入官吏等ヨリ領收スルトキハ直ニ領收證ヲ交付ス。會計規則第二十七條 其手續ハ、明治二十六年十一月、大藏省訓令第三十九號金庫出納事務規程第二章歲入部ニ於テ定ムル所ナリ、其規程細密ナルカ故ニ茲ニ之ヲ略ス。
- 金庫ハ右ノ手續ヲ了ルトキハ、更ニ領收濟ノ旨ヲ歲入徵收官即チ稅務署長等ニ通知スルヲ要ス。會計規則第二十七條
- (2) 市町村ニ於テ、税金ヲ領收シタルトキハ、領收證書ヲ納稅人ニ交付シ、領收シタル税金ハ送付書ヲ添ヘテ之ヲ金庫ニ送付ス。國稅徵收法施行其詳細ナル規程ハ國稅徵收法施行細則ヲ見ルヘシ。
- (3) 收入官吏ニ於テ、領收シタルトキハ、其領收證ヲ納人ニ交付シ、領收濟ノ旨ヲ歲入徵收官即チ官廳長官等ニ報告スルモノトス。會計規則第二十五條 其詳細ナル規

定ハ諸收入收納取扱規程明治二十六年ニ在リ。大藏省訓令
若シ租税ニシテ納付ナキトキハ、滞納ノ處分ヲナスヲ得ヘク、租税以外ノモノニ
在テモ、相當ノ行政處分ヲナスコトヲ得ヘシ。

第二節 支出事務

第一〇〇 支出機關

支出機關トハ、支出ヲ命令シ若クハ現金ヲ支拂フ者ヲ總稱シテ云フ而シテ此ノ
命令機關ト支拂機關トハ、收入事務ニ於テ命令機關ト收入機關トヲ分チタルカ
如ク、全ク別箇ノモノトセリ。會計規則第二十九條ニ於テ、

仕拂命令ノ職務ハ現金出納ノ職務ト相兼ヌルコトヲ得ス

ト規定セルモノ是レナリ。

命令機關

命令機關ニ付テハ會計法第十三條ニ規定セリ。

國務大臣ハ其ノ所管定額ヲ使用スル爲ニ、國庫ニ向ヒテ仕拂命令ヲ發スヘ
シ。但シ別ニ定ムル所ノ規程ニ從ヒ、他ノ官吏ニ委任シテ、仕拂命令ヲ發セシ

ムルコトヲ得。

即チ此場合ニ於テ、國務大臣ヲ仕拂命令官ト云ヒ、委任サレタル者ヲ委任仕拂命
令官ト云フ。此委任ニ付テハ明治二十二年勅令第八十九號仕拂命令委任規定ニ
之ヲ定メタリ。

仕拂機關ハ

(1) 金庫 ヲ以テスルヲ本則トス。然レトモ

(2) 現金前渡官吏 ヲ以テ仕拂機關トスルコトアリ。現金前渡官吏トハ、(1) 軍隊
軍艦及官船ニ屬スル經營(二) 在外官廳ノ經費(三) 其他總テ外國ニ於テ仕拂ヲ
ナス經費(四) 運輸通信ノ不便ナル内國ノ地方ニ於テ仕拂ヲナス經費(五) 廳中
常用雜費ニシテ一箇年ノ總額金千圓ニ滿タサルモノ(六) 場所ノ一定セサル
事務所ノ經費(七) 各廳ニ於テ直接ニ從事スル工事ノ經費(但シ一主任官ニ付
六千圓迄ヲ限ル)等ノ場合ニ於テ、豫メ金庫ヨリ現金ノ前渡ヲ受ケオキテ債
權者ノ要求ニ應スルモノヲ云フ。(會計法第十五條及會計規則第四十二條)但
現金前渡ノ場合ハ之ニ類似セル場合ニモ適用セラル、モノトス。

第二〇〇債權者

茲ニ云フ債權者トハ會計法上國家ニ對シテ支出ヲ請求スル權利アル者ヲ云フ、即チ會計法第十五條ニ規定スル所ナリ。

國務大臣ハ正當ナル債主若ハ其ノ代理人ノ爲ニスルニ非サレハ、仕拂命令ヲ發スルコトヲ得ス。

左ノ諸項ノ經費ニ限リ、國務大臣ハ主任ノ官吏ニ委任シ又ハ政府ノ命シタル銀行ニ委任シテ、現金支拂ヲ爲サシムル爲ニ、現金前渡ノ仕拂命令ヲ發スルコトヲ得。

即チ債權者ハ正當ナル債主若ハ代理人其他之カ爲ニスル者、現金前渡官吏及ヒ銀行トス

第三〇〇仕拂命令ノ有效條件

仕拂命令トハ、支出ノ命令機關カ債權者ノ爲メニ仕拂機關ニ對シテ現金ノ仕拂ヲナスヘキコトヲ命スル命令書ヲ云フ。仕拂命令カ有效ナル可キ要件ハ、次ノ如シ。

會計法第十四條

(1) 會計規則第十一條ノ要件。即チ仕拂命令ハ各省大臣ノ調製セル仕拂豫算ニ基カサル可ラス。

(2) 會計法第十五條ノ要件。即チ債權者ハ前述セル者ナラサル可カラス。

(3) 會計規則第三十三條ノ要件。即チ仕拂命令ニハ債主若クハ其代理人ノ氏名仕拂フヘキ金額支出科目、年度、番號等ヲ記載スルヲ要ス。但支出科目ノ同一ナルモノハ、數人ノ債主ニ對シ集合仕拂命令ヲ發シ、別ニ各債主ノ金額氏名表ヲ添ユルコトヲ得。

(4) 會計規則第三十四條ノ要件。即チ其發行ハ一項毎ナルコトヲ要ス。異ナレル項ノ經費ヲ一ノ仕拂命令トシテ發行スルヲ得ス。

(5) 會計規則第三十六條ノ要件。即チ仕拂命令官ハ仕拂命令ヲ交付スル前ニ、豫メ案内仕拂命令ヲ金庫ニ送付セサル可ラス。但數人ノ債主ニ對スル集合仕拂命令及仕拂命令ヲ當テタル金庫所在地ニ在ル債主ニ仕拂ヲ要スルモノハ、直ニ仕拂命令ヲ金庫ニ送付スルモノトス。會計規則第三十五條

(6) 會計規則第四十三條ノ要件。即チ仕拂命令ハ所屬年度經過後五箇年以内ニ、

金庫ヨリ仕拂ヲ受ケサル可ラス。
第四、現金前渡ノ仕拂命令ノ有效條件

現金前渡ノ場合ニハ、以上ノ要件ノ外、左ノ條件ヲ要ス。

(1) 記載事項 前述第三ノ要件中、債主若クハ代理人ノ氏名、仕拂フヘキ金額ノ代ニ、前渡ヲ受クヘキ官吏ノ資格氏名(銀行ナレハ)其名稱、前渡ヲ爲スヘキ金額ヲ記載スルヲ要ス 會計規則第三十三條

(2) 仕拂命令ノ發行方法 ハ、左ノ區分ニ從フモノトス 會計規則第三十九條

- (一) 常時ノ費用ニ依ルモノハ、每一箇月分ノ費額ヲ豫定シテ、仕拂命令ヲ發スヘシ。但或一定ノ場合ニハ二箇月以上六箇月迄合セテ發スルコトヲ得。
- (二) 隨時ノ費用ニ係ルモノハ、所要ノ費額ヲ豫定シテ事務上差支ナキ限ハ成ルヘク分割シテ仕拂命令ヲ發スルコト。
- (三) 各廳ニ於テ直接ニ從事スル工事ノ繼費ハ工事ノ大小ニ由リ、其所要ヲ量

リ六千圓以内ニ於テ仕拂命令ヲ發スルコト。

(3) 發行ノ場合 ハ、既ニ現金前渡官吏ヲ説キタル所ニ於テ列舉シタル七箇ノ

場合ノ外、銀行カ現金前渡ノ委任ヲ受クル場合ニ於テハ、國債元利金仕拂ノ

場合ニノミ發行スルヲ得ルモノトス 會計規則第四十二條

第五、仕拂命令ノ執行

金庫ハ案内仕拂命令、集合仕拂命令、若クハ金庫所在地外ニ在ル債主ニ仕拂ヲ要スル仕拂命令ヲ受ケタルトキ、其命令合式ニシテ且仕拂豫算各項ノ金額ニ超過セサルトキハ、仕拂ヲ爲スヘシ。會計規則第四十五條。左ノ場合ニ於テハ事由ヲ仕拂命令持參人ニ告ケ、金庫ニ於テ仕拂命令ノ執行ヲ拒ムヘシ 會計規則第四十六條

(1) 案内仕拂命令ノ到着セサルトキ。

(2) 仕拂命令ト案内仕拂命令ト符合セサルトキ。

(3) 仕拂命令汚損シ案内仕拂命令ト照合シ難キトキ。

第六、仕拂命令ノ整理

各年度ノ仕拂命令ニシテ、翌年度六月三十日迄ニ仕拂ノ請求ナキ仕拂命令濟金額ニ相當スル資金ハ、普通ノ歲計剩餘ト區別シテ國庫ニ於テ繰越整理スヘシ 會計規則第四十七條

前述ノ資金中、年度經過後滿五箇年内ニ仕拂ノ請求ナクシテ五箇年ノ時効ニヨリ政府カ負債ノ義務ヲ免レタルモノアルカ爲メ不用トナリタルモノハ、其負債ノ時効ニカ、リタル年度ノ歳入ニ組入ルヘシ同上第四十八條

第三節 豫備金ノ支出

第一、豫備金支出ノ場合

- (1) 第一、豫備金、ハ避クヘカラサル豫算ノ不足ヲ補フモノナルコトハ、會計法第七條ニ規定スル所ニシテ、豫算ノ不足トハ憲法第六十四條ニ所謂款項ニ超過シタルヲ云フ。故ニ第一豫備金支出ノ要件トシテハ、
 - (一) 豫算ノ款項ニ存在スル事項ナルコト。
 - (二) 其必要避クヘカラサル事カ勅令ニテ規定サレタル範圍内ナルコト。
- 而シテ避ク可カラサル場合カ、毎年勅令ヲ以テ定マルコトハ會計規則第十八條ニ規定セラル其内容ハ之ヲ一言セハ、法令又ハ契約ノ結果トシテ不得止モノニシテ、憲法第六十七條ノ經費中ニ包含セラル、モノトス。

避ク可カラサル場合ノ内容

豫定セラレサリシ事實

- (2) 第二、豫備金、ハ豫算外ニ生シタル必要ノ費用ニ充ツルモノニシテ、豫算外トハ豫算ノ款項ニナキモノヲ云フ。故ニ第二豫備金支出ノ要件トシテハ、
 - (一) 豫算ノ款項ニ存在セサル事項ナルコト。
 - (二) 其必要カ豫定セラレサリシモノナルコト。
- 而シテ其豫定セラレサリシ事實トハ、法令ノ發布ナルコトアリ、或ハ天災地變等不時ノ出來事ナルコトアリ。
- (3) 特別會計ノ豫備金、特別會計中、作業ニ屬スルモノニハ第一豫備金ノ外豫備金ナルモノアリ。是レハ其支出要件トシテ
 - (一) 豫算ノ款項ニ存在スル事項ナルコト。
 - (二) 其必要カ別ニ制限セラレサルコト。
- ヲ有ス。其第一條件ハ、第一豫備金ト同一ナレトモ、第二條件ニ於テ異レリ。即チ第一豫備金ノ場合ニハ、豫算費目中ノ一部分ノミ適用ヲ見レトモ、此ノ場合ニ於テハ、豫算費目ノ何レニモ適用ヲ見ルコトヲ得ヘシ。

第二、豫備金支出ノ手續

豫算後論 豫算施行論 豫算施行ノ手續 豫備金ノ支出

(1) 第一豫備金、各省大臣第一豫備金ノ支出ヲ要スルトキハ、金額理由ヲ示ス所ノ計算書ヲ作り、大藏大臣ノ承認ヲ經レハ足レリ。而シテ大藏大臣其支出ヲ承認シタルトキハ、之ヲ會計検査院ニ通知ス會計規則第十條、第九條、第二十條

(2) 第二豫備金、各省大臣ハ、第二豫備金ノ支出ヲ要スルトキハ、金額理由ヲ示ス所ノ計算表ヲ作り、之ヲ大藏大臣ニ送付ス。大藏大臣ハ此計算書ヲ調査シ意見ヲ付シテ勅裁ヲ請ハサル可カラス。會計規則第二十條、第二十二條而シテ右支出ノ勅裁アリアタルトキハ、大藏大臣ハ其事故金額ヲ會計検査院ニ通知シ及官報ニ掲載ス同第十二條、第十三條

(3) 特別會計ノ豫備金、ハ、其性質寧ろ第一豫備金ニ類似スルモノナルカ故ニ支出ノ手續ハ第一豫備金ニ同シ。是レ作業及鐵道會計規則等ノ規定スル所ナリ第十條

第三、國庫剩餘金及豫定國庫剩餘金ノ支出

豫備費カ豫算ノ不足ヲ補フモノナルコトハ、以上ノ如シトシテ更ラニ考フヘキハ政府ハ豫備費以外ニ於テ豫算ノ不足ヲ補フ支出ヲ爲シ得サルヤ否ヤノ問題

ナリ。即チ國庫剩餘金、支出トハ、此ノ不足ヲ前年度ノ國庫剩餘金翌年度ノ歲入ニ計法第二十條ヲ以テ充テント云フニアリ。豫定國庫剩餘金、支出トハ當該年度ニ若干ノ剩餘金ヲ生ス可キコトヲ豫想シ之レヲ引當ニ豫メ支出センヒスルモノナリ。

此問題ハ、我帝國議會ニ於テ屢爭論トナリシ所ニシテ第二十一議會ニハ左ノ改正法律案ノ發議ヲ見ルニ至レリ(明治三十八年二月)

會計法第十二條第二項ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ
國務大臣ハ、憲法第七十條ノ場合ヲ除クノ外、豫備費ノ定額以外ニ豫算超過又ハ豫算外ノ支出ヲ爲スコトヲ得ス。

此提案ニ依レハ、前述セル二箇ノ支出ヲ不可能タラシムルニアルモノ、如シ吾輩ノ信スル所ヲ以テスレハ彼ノ國庫剩餘金、支出ノ場合ハ止ムヲ得サルモノナラハ、何トナレハ、豫備費ノ金額僅少ナルカ若クハ必要ナル不時ノ出來事簇生スルカ如キコトアラハ豫備費ノ支出ノミヲ以テハ、不足ヲ告クルコトアルニ至ルヘシ。此ノ場合ニ於テ法令ノ執行ヲ中止シ契約ノ履行ヲ遷延シ、若クハ不時ノ

豫定國庫
出餘金支

出來事ニ救濟ノ道ヲ與ヘサルノ方策ヲ採ラハ論外ナレトモ、國家ノ體面ヲ重シシ簡人ノ損害ヲ諒トシ若クハ人民ノ安寧ヲ保維センコトヲ欲セハ之ヲ國庫剩餘金ニ求メスシテ何レノ道ニ依ルコトヲ得ンヤ。彼憲法七十條ノ規定ノ如キハ其事重大ニ非スンハ妄リニ用フ可キニ非サルナリ。唯爲政官カ之ヲ濫用スルヲ批難スルカ如キハ固ヨリ正當ニシテ苟モ其事實カ明白ナル以上ハ、吾人モ之ニ賛成スルコトヲ躊躇セサルナリ。吾人ノ茲ニ云フ所ハ唯國庫剩餘金ノ支出ハ其事柄ハ正當ナル以上ハ、會計法第二十條ニ對照シテ、決シテ違法ノ處置ニ非ルコトヲ云フノミ。

反之豫定國庫剩餘金支出ノ場合ハ、加何ナル辨解ヲ試ムルモ、到底其違法タルコトヲ免ルハ能ハサル可シ。何トナレハ是レ會計法第二十條ニ依リ剩餘金ニアラスシテ、其年度内ニオケル剩餘金ヲ、該年度内ニ使用スルモノナルヲ以テ款項ノ流用若クハ目的外ニ定額ヲ使用シタルモノ（會計法第十二條）トシテ、違法ノ處置タルヲ免レサレハナリ。

第四節 收支殘額ノ整理

第一總說

豫算ノ施行ニハ、前述ノ如ク會計年度アリ、以テ一年度ノ收支ヲ決定スト雖モ、收入支出共ニ其年度内ニ全ク結了セス、次年度ニ於テ、整理スルニ至ルモノアリ、之ヲ稱シテ收支殘額ノ整理ト云フナリ、今左ニ其ノ大様ヲ述フヘシ

第二歲入殘額ノ整理

會計法第十一條ニ曰ク

每會計年度ニ於テ政府ノ經費ニ充ツル所ノ定額ハ、其ノ年度ノ歲入ヲ以テ之ヲ支辨スヘシ

此規定ハ、之ヲ推論スレハ、一、年度ノ歲入ハ、他年度ノ歲入ト混合ス可ラサルコトヲ言ヘルモノナリ。而シテ是レ實ニ會計法上ノ原則ナリ。然ルニ此ノ原則ハ實際ノ上多少ノ例外ヲ見サルヲ得ス。是レ茲ニ歲入殘額ノ整理トシテ論スル所以ナリ。會計法第二十三條ニ曰ク、

歲入ノ原則

殘額ノ整理

誤拂、過渡トナリタル金額ノ返納、出納ノ完結シタル年度ニ屬スル收入、及其ノ他一切豫算外ノ收入ハ、總テ現年度ノ歳入ニ組入ルヘシ。但シ法律勅令ニ依リ前金渡、概算渡、繰替拂ヲ爲シタル場合ニ於ケル返納金ハ、各之ヲ仕拂ヒタル經費ノ定額ニ戻入ル、コトヲ得。

此規定中ニ於ケル返納金中、誤拂トハ債權者タラサルモノ過渡トハ金額ヲ過度ニ仕拂ヒタルコトヲ云ヒ、前金渡トハ前金前渡(會計法第十五條)前金拂(同條第二十五條)ノ場合ヲ總括シテ云ヒ、概算渡トハ旅費ノ如ク將來債權者タルモノニ豫メ概算的ニ支出スルヲ云ヒ、繰替拂トハ一時、或費目ニ仕拂フヘキ金額ナキトキ他日ノ返済ヲ期シテ他ノ費目ニ充ツヘキ金額ヲ以テ立替ヘオクコトヲ云フ。又出納ノ完結シタル年度ニ屬スル收入トハ、所謂過年度ノ收入ニシテ豫算外ノ收入トハ、豫定セサル收入ノ意味ニシテ盜難金ノ發見セラレタルカ如キヲ云フ。

此等ノ諸收入ハ、總テ現年度ノ歳入ニ組入ラル。即チ其收入ノ日カ翌年度四月一日以後ナルトキハ翌年度ノ歳入トシ、例之甲年度三月三十日ニ金庫カ盜賊ニ遭ヒシニ、其後四月三日ニ至リテ之ヲ回復シタリトセハ、此金額ヲ乙年度ノ歳入ト

歳出ノ原則

ナスカ如シ。但シ前金渡、概算渡、繰替拂ノ返納金ノ場合ニハ、特ニ五月三十一日迄延期シテ、此期日迄ノ分ハ前年度ノ定額ニ戻入レシメ、六月一日以後ハ返納シタル年度ノ歳入ニ組入ル、コト、セリ。會計規則第六十五條

第三、歳出殘額ノ整理
會計法節三條ニ曰ク、

各年度ニ於テ決定シタル經費ノ定額ヲ以テ、他ノ年度ニ屬スヘキ經費ニ充ツルコトヲ得ス。

殘額ノ整理

此規定ハ、即チ一、年度ノ歳出ハ、他、年度ノ歳出ト混合スヘカラサルコトヲ言ヘルモノナリ。而シテ是レ亦收入ノ場合ト同シク、會計法上ノ原則ナリ。然ルニ此原則モ收入ニ於ケルト同様ニ、多少ノ例外アリ。是レ茲ニ歳出殘額ノ整理トシテ論スル所以ナリ。

(1) 歳計剩餘、會計法第二十條ニ曰ク、

各年度ニ於テ歳計ニ剩餘アルトキハ、其ノ翌年度ノ歳入ニ繰ルヘシ、

(2) 過年度支出、會計規則第六十條ニ曰ク、

豫算後論 豫算施行論 豫算施行ノ手續 收支殘額ノ整理

過年度ニ屬スル經費ノ支出ヲ爲ストキハ、現年度各省定額ニ對シ仕拂命令ヲ發スヘシ。

第六十條ニ據リ支出セントスル經費ノ金額ハ、豫備金ヲ以テ補充シ得ヘキモノ、外其經費所屬年度ノ豫算ニ於テ該經費ノ屬スル毎項定額中不用トナリタル金額ヲ超過スヘカラス。同第六十二條

茲ニ過年度ト云フハ、過去ノ年度ノ義ナリ。

(3) 定額繰越、定額繰越トハ各省大臣カ豫算ノ殘額ヲ國庫ニ納付セントテ翌年度ニ繰越シ、同一ノ目的ニ使用スルコトニシテ、其場合ハ會計法第二十一條ニ定メタリ。曰ク

豫算ニ於テ特ニ明許シタルモノ、及一年度内ニ終ルヘキ工事又ハ製造ニシテ、避クヘカラサル事故ノ爲ニ、事業ヲ遅延シ、年度内ニ其ノ經費ノ支出ヲ終ラサリシモノハ、之ヲ翌年度ニ繰越シ使用スルコトヲ得。

又繼續費ノ繰越ハ、同第二十二條ニ規定セリ。曰ク
數年ヲ期シテ竣功スヘキ工事製造及其ノ他ノ事業ニシテ、繼續費トシテ總

額ヲ定メタルモノハ、毎年度ノ仕拂殘額ヲ竣功年度マテ、遞次繰越使用スルコトヲ得ト。

蓋シ、定額繰越ヲ許シタル所以ハ、或ル事業カ繼續的ノ性質ヲ有スル場合ニ豫算ヲ組立ツル手數ヲ少カラシメントスルニ出ツルモノニシテ、之ヲ要スルトキハ、翌年度五月三十一日迄ニ繰越計算書ヲ作り、大藏大臣ノ承認ヲ經サル可ラス。會計規則第五十七條 大藏大臣之ヲ承認スルトキハ、之ヲ會計検査院ニ通知ス。同第十九條

第四〇餘論

茲ニ一言スルハ、出納整理期間ヲ以テ、此收支殘額ノ整理ト混合ス可ラサルコトナリ。譬ヘテ言ハ、出納整理期間ハ會計年度ノ例外トシテ見ルヘキモノニシテ收支殘額ノ整理ハ年度讓渡禁止ノ例外トシテ見ルヘキモノナリ。前者ハ其期スル所ハ期間ノ擴張ニアレトモ、後者ハ之ニ反シ唯年度ノ讓渡ヲ許容スルニアルノミ。

第五節 豫算施行ニ關スル注意

第一〇秘密會計

秘密會計トハ、豫算上ニ掲記セラレサル隱密ノ財源ヲ有シ、而シテ之ヲ以テ秘密ノ支出ニ充ツルコトヲ云フ。例之山林ノ拂下代、地代若クハ預金ノ利子ノ如キハ往々之レカ財源タルモノニシテ、其收入カ既ニ隱密ナル位ナレハ、其支出カ從テ正當ノ目的以外ナルヤ言ハスシテ明カナリ。斯クノ如キ弊害ハ、現今ニ於テハ之ヲ見ルコト稀ナリト雖モ、往古ニ於テハ屢起リタル事實ニシテ佛國ニテハ、之ヲオンスレイ曖昧金ト稱シナボレオン第一世ノ時ノ如キハ、頗ル盛ニ行ハレタリト云フ。而シテ現今斯ノ如キ事實ハ現行監督制度ノ嚴格ナルニ伴ヒテ消滅セルモ尙私人若クハ私立會社ト交換的ノ利益ノ爲ニ、隱密收入ヲ生セシムルコトナシトセス、最モ戒メサル可ラス。

第二〇虛偽ノ支出

虛偽ノ支出トハ、實際上支出ナキニモ關セス、表面上眞ニ支出アリシモノ、如ク

スルコトヲ云フ、即チ虛偽ノ支拂命令ナリ。例之實際出勤セサル者ニ對シテ俸給ヲ支給シ、實際出張セサルモノニ對シテ旅費ヲ支給スルカ如シ。斯ノ弊害ハ、支拂命令官及ヒ其補助機關カ精密ナル注意ヲ要スル所ナリ。

第三〇官金ノ消費

是レ現金前渡官吏等ニ於テ見ル所ニシテ、自己ノ保管セル官金ヲ私用ノ爲ニ消費スルモノナリ。故ニ現金ノ出納ハ成ル可ク金庫制度ニ因テ、中央銀行ニ保管セシムルコト、シ、現金前渡ノ場合ハ、勉メテ制限セサル可カラス。我國ノ如キ會計法上嚴密ナル規定アルニモ關セス、尙ホ此犯罪ヲ爲ス者アリ、慎マサル可ケンヤ。

第四〇剩餘金ノ濫用

剩餘金ノ濫用トハ、會計法第二十條ニ由リテ翌年度ノ歳入ニ繰入ルヘキ金額カ年度末ニ存在スルトキ、各官廳ノ長官カ謹慎ヲ欠キ之ヲ消費シテ剩餘ナキニ至ラシムルヲ云フ。即チ不用ノ物品ヲ購求シ不急ノ工事ヲ爲シ、必要ナキ出張ヲナシ、又ハ事務ニ差支ナキ冗員ヲ置クカ如シ。此弊害タルヤ、固ヨリ會計法上違法ノ處置ニアラサルモ、不當ノ處置タルヲ免レス、何レノ國ニ於テモ免レサル所ナリ。

第五〇不當利得

茲ニ不當ノ利益ト云フハ、收入官吏カ私人ヨリ收納セル收入ヲ直ニ金庫ニ拂込
マスシテ、或期間ヲ利用シ其間ニ不當ノ利益ヲ受クルコトヲ云フ。現金前渡官吏
カ國庫金ノ保管中之ヲ利用シタル場合モ亦同シ。我會計法ハ此弊害ヲ防クタメ
收入官吏ニ對シテハ會計規則第二十六條ノ規定、現金前渡官吏ニ對シテハ同第
三十九條第四十條等ノ規定ヲ設ケタル上、兩者ニ對シ同第九十一條ヲ以テ帳簿
金櫃ノ検査規定ヲ設ケタリ。

第四章 出納官吏及諸文書

第一節 出納官吏

第一〇出納官吏ノ意義

出納官吏トハ、政府ニ屬スル現金ハ、出納ヲ掌ル所ノ官吏ヲ云フ。我會計法ノ規定
スル所ニ依レハ(1)收入官吏(2)現金前渡ヲ受ケタル官吏(3)金庫出納役ノ三者ト
ス。此他尙物品ノ出納ヲ掌ルモノ即チ物品出納官吏モ亦此内ニ入レトモ、本論ノ

範圍外ナルヲ以テ之ヲ説カス。又金庫出納役ハ即チ日本銀行總裁ニシテ之ヲ純
然タル官吏ニ比シ、其地位多少異ルカ故ニ、茲ニハ唯收入官吏ト現金前渡官吏ト

ニ付テ説明セントス。

第二〇出納官吏ノ責任

出納官吏ハ、其保管スル現金ニ付、一切ノ責任ヲ負ヒ、會計検査院ノ検査判決ヲ受
ケサル可ラス。(會計法第二十六條)其責任ニ屬スル會計ニ付、自身ニ事務ヲ執ラサ
ルヲ理由トシテ、責任ヲ免ル、コトヲ得ス。但各省大臣ノ命令ヲ以テ、特ニ其代理
官若クハ分任官ヲ定メタルトキ、此等ノ者ノ所爲ニ付テハ例外トス。(會計規則第
八十四條)出納官吏若シ水火盜難又ハ其他ノ事故ニ由リ、其保管スル所ノ現金ヲ紛失シタ
ル場合ニ於テ、其保管上避ケ得ヘカラサリシ事實ヲ會計検査院ニ證明シ、責任解
除ノ判決ヲ受ケタトキハ、其負擔ヲ免ル、コトヲ得ヘシ。

第三〇身元保證金及辨償

出納官吏ハ、以上ノ責任ヲ有スルヲ以テ、之カ擔保トシテ身元保證金ヲ納メサル
可ラス。(會計法第二十八條)其金額ハ、各省大臣之ヲ定メテ、會計検査院ニ通知ス。即

辨償

チ各省所管出納官吏身元保證金取扱規則ノ定ムル所ナリ。會計規則 第二百二條
 身元保證金ハ、現金ヲ以テ納ムルヲ本則トス。但公債證書若クハ土地ヲ以テ之ニ
 代用スルコトヲ得、其證書土地等ハ、各省大臣若クハ其指定シタル官吏ニ書入ト
 シ、土地ハ私費ヲ以テ登記ヲ受ケサル可ラス。會計規則 第四百三條
 各省大臣ハ、所屬出納官吏ノ所爲ニ由リ政府ノ損失ヲ生シタリト認ムル場合ニ於
 テハ、會計検査院ノ判決以前ト雖モ辨償ヲ命スルコトヲ得。出納官吏若シ負擔ノ責
 ヲ免ルヘキ理由アリト信スルトキハ、會計検査院ノ判決ヲ求ムルコトヲ得。同第八條
第九條 又出納官吏カ其指定シタル期限内ニ損失金ノ辨償ヲナササルトキハ、其
 身元保證金若クハ公債證書、土地等ノ公賣代價ヲ以テ、辨償ニ充ツルモノトス。若
 シ足ラサルトキハ、其不足ハ出納官吏ヨリ徴收ス。同 第六百五條
 前記ノ身元保證金ハ、相當ノ資産アル者二人以上ヲ以テ、其全部若ハ一部ヲ免除
 スルコトヲ得。此場合ニ於テ、出納官吏損失金ノ辨償ヲ命セラレ辨償スルコト能
 ハサルトキハ、保證人ヲシテ辨償セシム。同 第二百二條、第五百五條
 第四、出納官吏ノ監督

出納官吏ハ、管ニ各省大臣ノ指揮監督ヲ受クルノミナラス、又大藏大臣ノ指揮監
 督ヲ受クルモノトス。即チ大藏大臣又ハ各省大臣ハ、必要ト認ムルトキハ、検査員
 ヲ命シテ出納官吏ノ帳簿金櫃ヲ検査セシムルコトヲ得。同 第八十六條、第九十一條

第二節 會計文書

第一、帳簿

帳簿ハ收支ノ事實ヲ其儘ニ記載スルモノニシテ、會計上ノ基礎ヲナスモノトス。
 我國ノ制度ニ依レハ、大藏省ハ日記簿、原簿、補助簿、主計簿ヲ、歳入徴收官ハ徴收簿
 ヲ、歳入事務管理廳ハ歳入簿ヲ、金庫出納役ハ支出簿及現金出納簿ヲ、出納官吏ハ
 現金出納簿ヲ備フルコトヲ要ス。會計規則 第九條

第二、報告

報告トハ收支ノ狀況ヲ明了ナラシムルタメ、受領機關ヨリ收入命令機關ニ、收入
 命令機關又ハ仕拂機關ヨリ大藏省ニ通達スル文書ヲ云フ。即チ金庫ニ付テハ、會
 計規則第二十七條第四十八條ニ、收入官吏ニ付テハ同第二十五條ニ、歳入徴收官

ラス。佛國ノ學者ハ其ノ機關本來ノ性質ニ從ヒテ名稱ヲ附與セリ。

(1) 行政監督即チ行政機關ニ由ル監督ハ、行政部内ニ於テ大藏大臣又ハ各省

大臣カ監督機關トシテ豫算施行ノ非違ヲ妨壓スルモノナリ。

茲ニ注意スヘキハ、茲ニ云フ行政監督ハ前ニワグナー氏ノ云フ所ノモノト
全ク相異ルコトナリ

(2) 立法監督即チ立法府ニ由ル監督ハ、帝國議會カ豫算協賛ノ權能ヲ發揮シ

タルト同時ニ其協賛シタル豫算カ果シテ正當ニ適法ニ施行セラレタルヤ
ヲ監視スルモノトス。

(3) 司法監督即チ司法的職司ヲ有スル會計検査院ノ監督ハ、行政府ト全ク獨

立ノ地位ヲ占メ、豫算ノ施行ニ付キ十分ニ審査ノ實ヲ盡スニアリ。

而シテ順序ヨリ云フトキハ、行政監督ハ最モ前ニ行ハレ、司法監督之ニ次キ、立法
監督ハ通常最後ニ行ハル、モノトス。

第二節 監督ノ時期

ワグナー
氏ノ云フ
モノトハ
異ル

第一〇〇二制度

監督ノ時期ニ付テ監督制度ヲ分ツトキハ、二種ニ大別スルコトヲ得ヘシ。

(1) 事前監督 (Präventiv Kontrolle.)

(2) 事後監督 (Repressiv Kontrolle.)

是レナリ。事前監督トハ、現金收支ノ未タ行ハレサル以前即チ豫算施行ノ結了セ
サル以前ニ於テ行ハル、所ノ監督ヲ云ヒ。事後監督トハ、豫算施行後ニ於テ始メ
テ行ハル、所ノ監督ヲ云フ。我國ニ於テハ、司法監督並ニ立法監督ニハ事前監督
ナルモノナク、皆事後監督ナリ。或ハ議會ノ豫算協賛ハ、或ル意味ヨリ云フトキハ、
事前監督ナリトモ云ヒ得ヘシ。然レトモ、嚴格ノ意味ニ於テハ議會ノ協賛ハ豫算
ノ成立前ニ係ルモノニシテ、豫算成立後施行ノ際ニ於ケルモノニアラサルカ故
ニ、之ヲ事前監督ト云フコトヲ得ス。即チ我國ニテ事前監督ノ行ハル、ハ、唯行政
監督ニ止マルモノトス。

第二〇〇二制度ノ得失

事前監督ト事後監督ト何レカ會計ノ監督上有效ナルカハ、頗ル研究ニ價スル問

我國ノ制
度

題ナリ、今大體ニ付テ之ヲ論評スレハ、事前監督ハ事後監督ニ比シテ一層有效ナルモノナリ、故ニ彼ノグナイスト氏モ、法治國ノ保證トシテモ、事前監督ハ希望セサルヘキモノナリト云ヘリ、然レトモ、他ノ極端ニ走リ、事前監督ニ付テ嚴密ナル制度ヲ存スルトキハ、行政ノ圓滑ナル進行ヲ害シ、殊ニ大國ニ於テハ其實行極メテ、困難ニシテ大規模ノ組織ニ由ラスンハ其目的ヲ達スルコトヲ得サルヘシ、故ニ事前監督ヲ主義トセル白耳義國ノ如キモ、事前監督ニ對シ重要ナル除例外ヲ設クルノ必要ヲ見ルニ至レリ、要之、事前監督ト事後監督トハ、其實蹟ニ優劣ノ差アルハ明カナレトモ、サレハトテ一方ニ偏シテ一方ヲ捨ツルコトヲ得ス、兩々相提携シテ始メテ監督ノ實ヲ舉クルコトヲ得ヘシ、我國ノ如キハ、現行ノ制度事後監督ニ偏スルノ嫌ヒナシトセス、若シ司法監督即チ會計検査院ノ權限ノ範圍ヲ擴張シテ、獨リ事後監督ニ止マラス、或ル事項ニ付テハ事前監督ヲモ行フコトヲ得ルモノトセハ、其實蹟上得ル所蓋シ今日ノ比ニ非サル可キナリ、

第二章 行政監督

第一。行政監督ノ原則。

行政監督トハ、前述セル如ク、行政部内ニ於テ行ハル、監督ニシテ、其主義ニ三アリ。

- (1) 各省分立主義。
- (2) 中央監督主義。
- (3) 折衷主義。

各省分立主義トハ、豫算施行監督ノ責任カ、一ニ各省大臣箇々ニ存スルモノヲ云フ、此方法ノ欠點ハ、一國會計監督ノ上ニ統一スル所ナキニアリ、又各省大臣ハ、其所管セル官廳ノ監督ニ付テ往々其實ヲ爲サ、ルノ弊アリ、唯大臣ニシテ其人ヲ得ハ監督粗漏ノ譏ヲ免ル、ヲ得ヘシ。

中央監督主義トハ、豫算施行監督ノ一切ノ責任ヲ大藏大臣ニ於テ負擔スルヲ云フ、此方法ハ統一ヲ得ル點ニ於テ前者ノ如キ欠點ナケレトモ、其監督統一ニ專ラニシテ周到ニシテ漏サスト云フ事ハ難シ。

折衷主義トハ、即チ此二主義ヲ合併セルモノニシテ、兩者ノ長所ナル統一ノ保持

ト周到ナルコトヲ集合シ得タルモノトス。我會計法上ノ主義モ亦之ニ外ナラ

第二、我國ノ制度

我國カ行政監督ニ付テ折衷主義ヲ採ルコトハ、既ニ論述セル豫算施行論ヲ通讀シテ之ヲ知ルヘシ。出納官吏タル者ハ各省大臣ノ指揮監督ノ外ニ大藏大臣ノ指揮監督ヲ受クヘシトハ、會計規則第八十六條ノ規定ニシテ、現金前渡官吏監督ノ規則ハ大藏大臣各省大臣ニ協議シテ之ヲ定ムヘシトハ、第四十條ノ規定ナリ。此等ハ其一例トシテ見ルコトヲ得ヘシ。

各省大臣

各省大臣カ會計上監督機關タル事實ヲアクレハ、出納官吏ハ凡テ所管大臣ノ監督ヲ受クルコト、一切ノ支拂命令ハ大臣ノ權限内ニ留保セル如キ是レナリ。故ニ各省大臣ハ、所屬出納官吏カ損失ヲ生シタルトキハ、辨償ヲ命スルヲ得ヘク、必要ト認ムルトキハ、臨時ニ検査員ニ命シテ帳簿金櫃ヲ検査セシムルコトヲ得ヘシ。其任免ノ權ヲ有スルカ如キハ言ヲ竣タス。又各省大臣ハ、任拂命令發行ノ權能ヲ有スル結果トシテ、金庫ハ其命令ニ非サレハ一錢一厘ノ支出モナスコトヲ得ス。

大藏大臣

彼ノ任拂豫算調製ノ如キ會計規則第十一條ハ、大臣カ此權能ヲ有スル當然ノ結果ナリ。又大藏大臣カ會計上監督機關タル事實ハ、歳入ノ徵收ニ付總括的ノ監督權ヲ有シ。大藏省所管内ノ任拂命令發行權ヲ有スルハ措テ論セス。出納官吏ハ凡テ大藏大臣ノ指揮監督ヲ受ケサル可ラス。其帳簿金櫃ハ各省大臣ト同シク臨時検査スルノ權アリ。金庫出納役ハ種々ノ報告計算書ヲ大藏大臣ニ送付セサル可ラス。又各省大臣ト雖モ毎年度任拂豫算ヲ調製シテ大藏大臣ニ送付セサル可ラス。豫備金ノ支出ハ大藏大臣ノ承認ヲ經サル可ラス。會計規則第十九條 定額繰越ヲ要スル場合モ亦然リ。會計規則第五十七條

第三、事前及事後監督

我國ノ制度トシテ、司法監督ニハ事後監督アリテ事前監督ナシ。然ルニ行政監督ニ於テハ事前及事後監督ノ兩者ヲ兼有ス。例之任拂豫算ノ調製、任拂命令ノ發行ノ如キハ事前監督ニシテ、諸般ノ報告ヲ徵スルカ如キハ事後監督ニ屬ス。

第五編 決算論

第一部 決算總論

第一章 決算史

第一節 西洋ノ決算史

第一〇〇總論

決算ハ豫算施行ノ結果トシテ生スル所ナレトモ、之ヲ古來ノ沿革ニ徵スレハ、決算カ却テ豫算ニ先テ發達シタルモノナルコトハ、既ニ豫算ノ沿革ノ章ニ之ヲ説ケリ。但シ其決算トハ、現今立憲ノ文明國ニ於テ了解サル、決算ノ意味ニアラスシテ、通俗ニ勘定計算ト云フカ如キ意味ニテ云フナリ。

今茲ニ決算史トシテ説明スルハ、斯ノ如キ古代ニ屬スル沿革ヲ述フルモ利益ナキカ故ニ、主トシテ真正ナル決算制度ノ起源ヨリセムトス。而シテ特ニ佛國ニ於ケル發達進歩ニ就テ研究セントス

第二〇〇會計検査院ノ創始

佛國ニ於テ會計検査院ハ、千八百七年ニ於テ舊時王政ノ財政會議ニ倣ヒナボレオン第一世ノ創立スル所ニシテ、純然タル裁判廳ナリ。其目的タルヤ、會計官吏ノ所業ヲ査定シ、法規ニ違背スルコトナケレハ其責任ヲ免シ、違背スルコトアレハ其責ニ任シテ辨償ノ責ニ當ラシムルニ在リ。之ヲ以テ會計検査院ハ、會計ノ判決ヲ宣告スル權ヲ有スルコト、セリ。ルロア、ホリヨ、氏ノ著書ニ依ル、以下同氏ノ書ニ依ル所多シ。

第三〇〇立法監督ノ創始

舊時會計ノ法未タ整ハサルニ當テヤ、所謂勘定計算ナルモノ存セシモ、往々數年ニ亘リテ完結ヲ告ケス、收支ノ殘額甚タ多ク、其決定ニ至ルノ期甚タ長カリキ。然ルニ佛國ニ於テハ、漸次改良ノ途ニ進ミ、遂ニ千八百十七年ニハ、毎年度ノ決算ヲ議會ニ提出シテ報告スルコト、セリ。是レ實ニ立法監督ノ創始ナリ。即チ同年三月二十五日ノ條例第四百十八條ニ依レハ、各省大臣ハ、其前年ニ取扱ヒタル經費ノ計算書ヲ以テ毎年ノ議會ニ提出シ、收支ヲ各科目ニ分類比較シテ示サ、ル可ラス。又大藏大臣ハ(1)國債ノ計算書(2)一般ノ計算書(3)國庫ノ計算書(4)租稅總收

入計算ヲ調製スルコトヲ要セリ。
 第四、立法監督ノ進歩

然ルニ、此制度ハ益進歩シテ、千八百十八年五月十五日ノ條例ニ於テハ、今後決算ハ特別ノ法律ヲ以テ之ヲ制定スヘキモノトナシ、毎年豫算法案ノ提出前ニ於テ、決算法案ヲ提出スヘキコト、セリ、蓋シ、此時ニ至ル迄、決算ノ提出ハ特ニ議會ノ承認ヲ要スル趣旨ニアラスシテ、唯國庫ニ幾何ヲ收入シ而シテ幾何ヲ支出セリトノ事ヲ記シ、大藏大臣之ニ捺印シテ其確實ナルヲ證シタル一片ハ、報告ヲ、議會ニ附與スルヲ以テ足レリトセシナリ、然ルニ右ノ條例ニ由リ、決算ハ之ヲ提出シテ議會ハ、承認ヲ經ルヲ要スルコト、ナレリ。

加之千八百十九年六月二十七日ノ條例ニ由レハ、決算ノ提出ニハ會計検査院ノ報告ヲ添付スヘキコトヲ規定セリ
 第五、決算ノ確定期

政府部内ニ於テ、決算ノ決定ヲナスハ、常ニ數年ニ亘ルヲ例トセリ、而シテ其原因ハ收支殘額ノ決定セサルモノ多キカ爲メナリ、然ルニ、千八百二十年度ノ決算法

案ノ審査委員ハ、各年度ノ計算ニ打切法ヲ用ユルノ必要ナルコトヲ説キ、千八百二十二年ノ條例ハ之ヲ規定セリ、其第二章ニ曰ク、

一年度ノ經費ハ、凡テ年度後九ヶ月内ニ仕拂ヲ終リ、翌年十二月三十一日迄

ニ決算ヲ終結シテ、之ヲ決定スヘシ。

ト、之ニ由テ決算ノ計算ニ、多大ノ便利ヲ見ルニ至レリ。

第六、其後ノ沿革

其後ニ至ルモ、決算制度ニ關スル改良ハ常ニ行ハレ、千八百三十三年四月二十四日ノ條例ハ、決算法案ヲ議會ニ提出スルハ、豫算法案ト同一ノ形式ニ從フヘキモノトシ、千八百三十六年七月九日ノ條例ハ、大藏大臣ハ國庫閉鎖ノ翌年ノ初メ二ヶ月間ニ説明書ト共ニ、決算法案ヲ提出シ、而シテ前年ノ歲計ノ現況並ニ之ニ關スル一切ノ文書ハ、翌年ノ始メ三ヶ月間ニ公表スヘキモノトセリ、又千八百五十年ニハ、國庫閉鎖期ヲ、二箇月短縮スルニ至レリ。

第二節 日本ノ決算史

第一、上古

會計検査ノ制度

我國上古ニ於テ、果シテ決算制度ナルモノアリシヤ否ヤ明カナラサルモ會計ハ、検査ニ付テハ夙ニ發達セシヲ見ル、大寶令ヲ見ルニ、中務省中ニ監物ノ官職アリ、出納ヲ監察シ管鑰ヲ請進スルヲ掌ラシム。降テ桓武天皇延暦十七年ニ至テ勘解由使ヲ置キ、諸官在職中ノ會計ヲ検査シ、之カ解由ヲ爲スヲ掌ラシム。蓋シ、監物、勘解由使共ニ後世ノ所謂會計検査官ニシテ、唯其異ル所ハ、監物ハ出納ノ當時之ヲ監察シ、勘觀由使ハ出納ノ後ニ於テ其解由ヲ爲スニ在ルノミ。然ルニ其後、武門政治ノ世トナルニ及ヒ、此等ノ官ハ皆有名無實トナリテ實權ナク、徒ニ古代官職ノ遺物トシテ記憶セララル、ニスキサリキ之ニ付テハ、小野梓氏著國憲汎論ヲ引用スル所多シ、以下亦同シ。

第二、徳川時代

徳川時代ニハ、人ノ知ル如ク勘定目附ノ官職アリ、其ノ勘定奉行ニ對スル關係ハ恰モ現今出納官吏ト會計検査官トノ如シ。即チ、勘定目附ノ職務ハ、主トシテ出納ヲ監督シ其非違ヲ匡スニ在リシナリ。

決算制度

又當時ニ在テハ、幕府ハ年々、決算ヲ行ヒタルカ如シ、慶安四年正月五日ノ令條ニ

ハ「毎年三月五日ヨリ御勘定始メ去年ノ分ハ中勘定致サルヘク、其餘ハ皆濟ムナリ」トアリ、以テ其概要ヲ知ルヘシ。

第三、明治第一期

維新ノ始メニ當リテ、百事舊制ヲ打破シ、新制ヲ以テ之ニ代ヘシカハ、會計殊ニ決算制度ノ如キモ、亦一新セラレタリ。然レトモ、其第一期即チ明治ノ初年ヨリ會計法制定(十三年)前迄ハ、其發達尙遲々タリキ。今此間ヲ第一期ノ時代トシテ、之ヲ述フヘシ。

決算ノ制度

明治ノ初年、各藩封土奉還以前ニ在リテハ、決算ノ法皆區々ニシテ統一スル所ナシ。明治五年九月ニ至リテ、出納諸帳簿整理ノ期ヲ定メ、毎年十月一日ヨリ起リ翌年九月三十日ニ至ル一周年ヲ期シテ、之ヲ調製セシム。即チ之ニ由テ、毎年決算ノ制定マレリ。然レトモ、當時ハ之ヲ強制的ニ行ハシメスシテ、其效力薄カリキ。而シテ、之ヲ勵行セシハ、明治十一年六月ニ在リ。又翌七月ニ至リテハ、收支決算ノ期ヲ定メテ、年度經過後二年トナセリ。是レ長足ノ進歩ト云フヘシ。

會計検査ノ制度

願ミテ當時ノ會計検査ノ状態ヲ見レハ、維新ノ當初ニ在テハ百事勿々ニ屬シ會

計監督ノコト十分ニ行ハレス。然ルニ四年八月ニハ、大藏省ノ組織ヲ改メ、其中ニ
 検査寮正算司ヲ設クルニ至レリ。而シテ検査頭ハ、金穀ノ出納ニ係ル一切ノ請求
 書ヲ審査シ、出納命令書ヲ發行スル前、先ツ其出納ノ正當ナルヤ否ヤヲ監察スル
 ノ權ヲ有セリ。是レ所謂事前監督ナルモノトス。爾後益検査寮(十年一月検査局ヲ
 改ム)ハ權限ノ擴張ニ努メ、十一年一月、太政官ハ検査員派出規程ヲ規定セリ。此規
 定ニ由レハ検査員ハ、毎年二回以上各廳計算ノ實況ヲ検査シ、豫定額中其不當違
 法ナルモノハ之ヲ更正スルコトヲ得ヘシ。之ニ次テ制定セラレシモノハ有名ナ
 ル検査條例ニシテ、検査局ノ權限ハ大ニ擴張セラレ、第五款ニハ金員ヲ收入支出
 スル前、検査局ハ必ス之ヲ檢シ其當否ヲ勘査スルコトヲ規定シ、第二、三款ニハ、檢
 査局ハ報告書勘定帳ニ由リテ豫算ト施行トノ差異又ハ正否ヲ檢案シテ決算證
 書ヲ交附スルコトヲ規定シ、第六款ハ、物品出納ヲモ検査スルコトヲ規定セリ。然
 レトモ、此規定ハ實際上各廳ニ對シテ勵行セラレサルノ有様ナリキ。

第四、明治第二期。

明治第二期トハ、會計法制定(十四年)前後ヨリ、帝國議會開設(二十三年)ニ至ル迄ノ

間トス。

決算制度

明治十二年十二月、大藏卿ハ、明治元年一月ヨリ八年六月ニ至ル決算表ヲ表シ之
 ヲ太政官ニ送付シ、十三年二月ニ至リ、太政官ハ之ヲ各廳ニ傳達セリ。此決算表ハ、
 各廳ニ傳達セルニ止マリ、未タ人民ニ公表セシニ非サルモ、既ニ決算公表ノ端緒
 ヲ開キシモノト云フヘシ。而シテ會計法ノ制定セラレ、ヤ、其第四十四條ニ於テ
 決算ハ、一般ニ公示スヘキコトヲ規定シ、其公示時期ノ如キハ年度經過後約一年
 半ノ後ニ在リシモノ、如シ。然ルニ十五年一月ノ改正會計法ニ由リ、此規定ハ變
 改セラレ、決算ヲ公示スル明文ヲ除キ、且各廳報告ノ期ヲ緩フセリ。

會計検査ノ制度

次ニ會計検査ニ付テ見レハ、十三年二月ニハ政府ハ検査局ヲ廢シテ別ニ會計檢
 査院ヲオキ、太政官ニ直隸セシメ會計法及検査院職制章程ノ制定ニ由リテ其組
 織權限ヲ定メタリ。之ニ由ルニ従前ノ検査局ハ、會計ノ事前監督ヲナセシモ、検査
 院ニハ此權力ナク、其ノ代リニ出納ノ翌日検査院ニ報告スルコト、セリ會計規
 條第十八然ルニ、十五年一月ノ改正會計法ハ、豫算ノ審査ト收支ノ翌日報告ノ規定ト
 ヲ廢シ、豫算ノ審査ハ大藏省ノ權限トナリ、收支ノ報告ハ毎月一回之ヲナスコト

トセリ、即チ、此改正ニ由リテ、検査院ノ権限ハ制限セラレシモノトス。
第五、明治第三期。

明治第三期ハ、帝國議會開設以後ニシテ、是ハ專ラ後ニ説明スルカ如ク、會計検査院ハ天皇ニ直隸シテ、行政部ト對等ノ地歩ヲ占メ、決算ノ結果ハ帝國議會ニ提出シテ公表スルコト、ナレリ。即チ第三期ニ入リテ、我國ノ決算制度ハ始メテ立憲國タルノ面目ヲ呈スルニ至リシモノトス。

第二章 決算ノ意義

第一節 決算ノ意義

第一、定義

決算トハ、豫算施行ニ對スル決定ニシテ、會計検査院ト帝國議會ノ審査ヲ經テ、公示セララル、モノナリ。以下之ヲ分解シテ説明スヘシ。

第二、決算ハ決定ナリ

決算ハ、通俗ニ解スレハ、單ニ收入支出ノ對照ナリト云フヲ得ヘシ。然レトモ、財政

學若クハ國法學上ノ決算ナルモノハ、單ニ比較對照ノ表タルニ止マラス、尙一層強キ意味ヲ有スルモノニシテ、豫算施行ノ決定タルナリ、從テ其ノ決定ハ之カ施行ノ任ニ當レル政府ノ責任ノ根底トナルモノトス。

決算カ決定ナリトハ、即チ決算カーノ事實ナルコトヲ意味ス。是レ豫算ト性質上異ル所ニシテ、豫算ハ主觀的ノ豫測ナルニ反シ、決算ハ客觀的ノ事實ナリ。

第三、決算ハ法律ニアラス

決算カ議會ニ提出セララル、ハ、立憲文明國ノ一般ニ採ル所ニシテ、或ハ豫算ヲ以テ法律ナリトスル國ニテハ、決算ヲモ法律ナリト云フナリ。蓋シ此等ノ國ニテハ、議會ノ議決スル所カ悉ク法律ナリトスル慣例ニ基ツクモノトス。然レトモ我國ニテハ、豫算カ法律ニアラサルト同様ニ、決算モ法律ニアラス。唯帝國議會ニ提出スヘキコトハ、帝國憲法第七十二條ニ規定スル所ニシテ、決算ノ性質上欠クヘカラサル要件ナリトス。

第四、會計検査院ノ審査ト公示

現今ノ決算制度ハ、議會ニ提出スルヲ必要トスルト同シク、會計検査院ノ審査ヲ

經ルコトヲ必要條件トス、是レナクレハ、以テ眞成ナル決算ト云フヲ得ス。又一般ニ公示スルヲ要スルモ同様ニシテ、秘密ノ下ニ蔽ハル、モノハ、眞成ナル決算ニアラサルナリ。

第二節 豫算ト決算トノ關係

第一〇總說

豫算ハ財政ノ豫測ニシテ、決算ハ其施行ノ結果ナリ。故ニ兩者ノ最モ善良ナル關係ハ、決算カ豫算ニ見積リタル所ト異ル所ナキニ在リ。然リト雖モ、斯ノ如キコトハ複雑ナル人事上全クアリ得可ラサル事實ナリ。果シテ然ラハ、決算ハ時トシテハ豫算ヲ超過スルコトアルヘク、時トシテハ不足ヲ告クルコトモアルヘシ。今此ノ中ニ於テ、一國財政上好マシキ現象ハ何レニアリヤト考フルニ。

- (1) 豫算ト決算トハ、成ル可ク大差ナキ状態ニ在ルコト、
- (2) 歳入ノ部ニ於テハ、決算ハ豫算ヨリモ却テ増加セルコト、
- (3) 歳出ノ部ニ於テハ、決算ハ豫算ヨリモ多少減少セルコト、

是レナリ、今左ニ實例ヲ示サム。

第二〇英佛二國ノ實例

英國

英國ハ財政常ニ良好ニシテ、歳出決算ノ如キハ當初ノ豫算額ニ及ハサルヲ例トス。然ルニ佛國ハ、從來財政常ニ健全ナラス、其歳出決算ハ當初ノ豫算額ヨリモ増加スルヲ常トス。學者ノ調査スル所ニ依レハ、千八百四十八年ヨリ七十七年ニ至ル二十九年間ノ英國ノ歳出決算ニ於テ、

- (1) 十九年ハ豫算額決算額ニ超ヘ、餘ノ十年ノミ決算額カ豫算額ニ超過セリ。而モ其十年中七年迄ハ戰爭其他止ムヲ得サル不時ノ出來事ノ爲ニ起リシモノナリ。

佛國

(2) 又歳入歳出ヲ比較スレハ、歳入ノ歳出ニ超過セシモノ二十年、其及ハサリシモノ僅ニ九年ノミ。而モ其中五年ハ、外征ノ爲メ重大ノ費用ヲ要セシニ由ル。次ニ佛國ニ付テ觀察スレハ、全ク反對ノ結果ヲ見ル。即チ前述ト同シク、千八百四十八年ヨリ七十七年ニ至ル二十九年間ノ佛國歳出豫算ニ於テ、

- (1) 決算額ノ豫算額ニ及ハサリシハ僅ニ一年ニシテ、他ハ皆決算額カ豫算額ヨ

リモ多シ。

(2) 又歳入出ノ關係ヲ見レハ、前記二十九年間、歳出ノ歳入ニ超過セシモノ二十年ニシテ、剩餘ヲ見シハ、僅ニ四年ノミ。而モ其四年中ノ二年ハ公債募集ノ結果ニシテ、眞ニ剩餘ヲ見シハ、僅ニ二年ナリ。

以上ノ比較ヲ以テ見レハ、豫算ト決算トノ關係ハ、實ニ一國財政ノ健不健ヲ試験スルモノニシテ、最モ注意シテ觀察スルヲ解ス。

第三、我國ノ現狀

我國ノ財政ハ近年良好ノ現象ヲ呈スルモノ、如シ今第二十一議會(明治三十七年十二月)ニ提出セル明治三十五年度總決算ヲ見ルニ、左ノ如キ結果ヲ見ル。

- (1) 歳入ノ決算額ヲ以テ豫算額ニ比較スレハ、千四百九十万圓ノ増加アリ。歳出ノ決算額ヲ以テ豫算額ニ比較スレハ、七百四十七万圓ヲ増加セリ。以上ノ兩者ヲ對照スレハ、尙七百五十万圓ノ決算ノ良結果ヲ見ル。
- (2) 次ニ歳入出ヲ比較スレハ、歳入合計二億九千七百三十四万圓、歳出合計二億八千九百二十二万圓、差引八百十二万圓ノ歳入剩餘ヲ見ル。

而シテ、單ニ經常歳入出ヲ比較スレハ、五千万圓以上ノ歳入剩餘アリ。其他、累年ノ決算ニ徴スルモ、我國ノ狀況ハ頗ル有利ナル状態ニアリ。然レトモ尙益此狀況ヲ維持増加セシムルハ、財政當局者ノ當ニカム可キ所ナリトス。

第二部 決算ノ調製審査

第一章 決算ノ調製

第一、決算ノ調製著

決算ハ、豫算施行ノ結果ニシテ、豫算施行ノ任ニ當ルモノハ即チ政府ナレハ、決算ノ調製者カ常ニ政府ナルコトハ論スルヲ須タス。而シテ豫算ノ調製ハ、財政ノ豫測ナルヲ以テ、議會カ之ニ當ルヲ以テ可トスル國體モアレトモ、決算ハ決定ノ事實ニ過キササルヲ以テ、行政府カ常ニ此任ニ當ルコトハ、諸國ノ其軌ヲ一ニスル所ナリ。然リ而シテ、豫算施行ノ行政監督權ヲ有スルモノハ大藏大臣ナルヲ例トスルカ故ニ、決算ノ調製者ハ總豫算ノ編製ト同シク大藏大臣ナルコトヲ常トス、我會計規則第五十一條モ亦

歳入歳出總決算ハ、總豫算ト同一ノ區分ニ據リ、大藏大臣之ヲ調製スヘシト規定セリ、各特別會計歳入歳出決算モ、亦同シ。
第二、決算ノ形式

決算ノ形式ハ、會計規則第五十一條及ヒ會計法第十六條ニ依リ豫算ト同一ナルモノトス、蓋シ、會計検査院並ニ帝國議會ノ審査ヲ經ルニ當リ、豫算ト對照スルノ便ニ供セントスルニ在ルナリ。
會計法第十六條ニ曰ク

會計検査院ノ検査ヲ經テ、政府ヨリ帝國議會ニ提出スル總決算ハ、總豫算ト同一ノ様式ヲ用キ、左ノ事項ノ計算ヲ明記スヘシ。

歳入ノ部

歳入豫算額

調定濟歳入額

收入濟歳入額

收入未濟歳入額

歳出ノ部

歳出豫算額

豫算決定後増加歳出額

仕拂命令濟歳出額

翌年度繰越額

今此等ノ目次ヲ以テ、主計簿ニ登記スヘキ目次會計規則第百十三條並ニ豫算ノ添付文書タル歳入歳出現計書會計規則第十五條ノ目次ニ比スルトキハ、歳入ノ部ニ於テ不納缺損額ヲ欠キ、歳出ノ部ニ於テ歳出殘額ヲ欠ケリ。而シテ、政府最近ノ實例ニ照スニ不納缺損額ハ會計法ニ規定ナキニモ關セス、實際之ヲ挿入スルヲ例トス。
此目次ノ如何ナルモノナリヤ、此目次ニ據ル決算ノ形式ノ如何ナリヤハ、豫算ノ部ニ説明セル所ヲ對比シテ、之ヲ見ルベシ。

第三、添付文書

總決算ノ添付文書トシテ調製スヘキモノ、左ノ如シ。

(1) 各省決算報告書

豫算ノ各省豫定經費要求書ニ當ルモノニシテ、各省大臣ハ翌年度十一月三十日マテニ、各省豫定經費要求書ト同一ノ區分ニ據リ、其省所管ニ屬スル經費ノ決算報告書ヲ調製シテ、之ヲ大藏大臣ニ送付スルモノトス。會計規則第五十二條

(2) 國債計算書

國債計算書ハ、大藏大臣ノ調製スル所ニシテ、之ニ左ノ事項ヲ示サ、ル可ラス會計規則第五十四條

(一) 當該年度末日ニ於ケル國債ノ種類及現高ヲ示ス所ノ計算。

(二) 當該年度ニ於テ償還シ及仕拂ヒタル各種國債ノ元高及利子ノ計算。

(三) 最近五箇年間ニ於ケル各種國債増減ノ景況ヲ示ス所ノ計算。

(3) 特別會計々算書

是ハ特別ノ會計ヲ立ルコトヲ許サレタル、事務ヲ管理スル所ノ各省大臣之ヲ調製シ、毎年度經過後五箇月以内ニ之ヲ大藏大臣ニ送付スルモノトス會計規則第五十五條

特別會計々算書ニハ、左ノ事項ヲ示スコトヲ要ス同第五十六條

(一) 收入計算

(二) 支出計算

(三) 最近五箇年度間資金ノ増減

(四) 最近五箇年度間損益ノ比較

又各特別會計ノ決算ニ於テハ、各特別會計決定計算書ヲ添付スルヲ常トス、此歳入歳出ノ決定計算書ハ、所管大臣之ヲ調製シ、翌年度八月三十一日マテニ之ヲ大藏大臣ニ送付ス作業及鐵道會計規則第九條

以上ノ添付文書ハ之ヲ調製シテ、後日帝國議會ニ決算ヲ提出スルトキ添付スル

モノトス會計法第十七條

第四、決算調製ノ時期

各年度經過後七箇月ノ末日ニ於テ大藏大臣ハ會計検査官立會ノ上ニテ、大藏省ニ備ヘタル主計簿ヲ締切ルコトハ、會計規則第一百九條ノ規定スル所ナリ。而シテ各省大臣カ、其所管ニ屬スル經費ノ決算報告書モ、同時ニ送付セラル、ナリ。大藏大臣ハ此主計簿ト決算報告書トニ由リテ、通常其翌年七八月頃マテニ決算ヲ

調製シ之ヲ閣議ニ提出シ其議決ニ由リ九月頃ニ會計検査院ニ送付スルヲ常ト
スト云フ。是ニ由テ見レハ我國ニテ決算ノ調製ハ主計簿締切ヨリ八九ヶ月ヲ經
過スルナリ。而シテ其期日因果シテ當ヲ得ルヤ否ヤハ次ニ之ヲ説明スヘシ。

第五、現行法ノ欠點

此調製期日ニ付テハ頗ル議論アル所ニシテ我會計法ニハ何等ノ規定ナシ。前述
セルハ通常ノ實例ナレトモ政府若シ決算提出ノ期ヲ緩フセント欲セハ調製期
日ノ延長ニ由テ如何程ニテモ遷延スルヲ得ヘシ。是レ現行法ノ欠點ト云ハサル
ヲ得ス。實際家ノ説ニ由ルニ決算調製ノ如キハ主計簿并ニ經費決算報告書ノ整
頓セル以上ハ之ヲ對照シテ摸寫スルニスキサレハ一ヶ月ヲ以テスルコトヲ得
ヘシト云フ。我國ニテモ將來規定ヲ設ケテ之ヲ制限スルノ要アルヘシ。

第二章 司法監督

第一節 會計検査院ノ組織

第一、司法監督ノ制度(其一)

司法監督トハ、行政政府ト全ク獨立ノ地位ヲ占メテ、司法的職權ヲ有スル機關カ、豫
算ノ施行ニ付審査ノ實ヲ盡スモノナルコトハ、既ニ監督制度論ニ説明セルカ如
シ。而シテ此機關ハ、即チ會計検査院ナリ。佛蘭西、暹羅、白耳義、和蘭、伊太利等、皆之
ヲ有ス。

然ルニ、國ニ依リテハ會計ヲ検査スル機關カ、斯クノ如ク絶對的獨立ノ地歩ヲ、行
政府ニ對シテ有セスシテ、行政政府内ニ在リテ特殊ノ地位ヲ有セシメ、以テ其權能
ヲ發揮セシムルモノアリ。英國及ヒ北米合衆國ノ如キ、之ニ屬ス。即チ此二國ニ於
テハ、大藏省内ニ検査總長検査官ヲ置キテ之ヲ掌ラシム、但此制度ハ、茲ニイフ純
然タル司法監督機關ト區別セサル可ラス。

第二、司法監督ノ制度(其二)

純然タル司法監督ノ制度中、其組織ニ付テ分テハ、之ヲ二種トナスコトヲ得。

- (1) 選舉的組織
- (2) 任命的組織

是レナリ。前者ハ、検査官ヲ舉クルニ議會カ年限ヲ定メ或ハ定メスシテ選舉スル

行政部内
ニ存スル
モノアリ

モノニシテ、後者ハ、官吏トシテ元首ヨリ任命スルモノナリ。例之白耳義、和蘭ノ如キ之ニ屬シ、其他ノ諸國ハ概シテ後者ニ屬ス。即チ、白耳義ニテハ六年ヲ任期トシテ下院之ヲ選舉シ、滿期後再任スルコトヲ得ヘシ。和蘭モ、下院ノ選舉スル所ナレトモ、其任期ハ之ヲ終身官トス。

(3) 折衷的組織

然ルニ、茲ニ兩者ヲ折衷セルモノアリ、丁抹ノ制即チ是レナリ。同國ニ於テハ、下院ノ奉呈セシ姓名簿ニ由リ、國王之ヲ任命スルモノトス。

以上ノ制度中何レヲ可トスルヤ、ハ一大問題ナリ。博士ボリュー氏ハ曰ク、議院カ官吏ヲ選舉スルハ敢テ稱スヘキコトニアラス。若シ議院ニ於テ選舉スルトキハ通例政治家ニシテ議員ノ再選ニ洩レタル者ヲ採リ、往々事務ノ經驗甚タ足ラス、政黨病ヲ免レサル者ヲ用ユル患アリ。且行政官ノ職權ヲ剝キ之ヲシテ徒ニ事務ノ監守タラシムルニ過キササルノ狀況ニ陥ラシムルコトアリ。吾人モ亦此說ニ賛成スルモノニシテ、検査官ノ身分上ノ保障ヲ鞏固ニスルトキハ、毫モ行政政府ニ掣肘セラル、コトナクシテ、其職司ニ忠ナルコトヲ得ヘキナリ。

三制度ノ得失

第三〇我國ノ制度(其一)

組織

帝國憲法ハ、第七十二條ニ於テ、會計検査院ノ組織及職權ハ法律ヲ以テ之ヲ定ムルコトヲ規定シ、而シテ會計検査院法及會計検査院事務章程ノ規定アリテ、之ヲ定メタリ。之ニ由レハ、我國ハ任命的組織ニ由ルモノトス。

地位

會計検査院ハ、天皇ニ直隸シ、國務大臣ニ對シテ特立ノ地位ヲ有ス。會計検査院ニハ、院長一名(勅任、親任待遇)部長三員(勅任、検査官十二名(勅奏任)ヲ置キ、之ヲ會計検査官トシ、別ニ書記官二員、検査官補二十員(奏任)屬若干員ヲオク。會計検査院ニハ三部ヲ設ケ、各部部长一員、検査官四員ヲ以テ検査ノ事務ヲ分掌ス。會計検査官ハ、刑事裁判若ハ懲戒裁判ニ依ルニ非サレハ、其ノ意ニ反シテ退官轉官又ハ非職ヲ命セラル、コトナシ。所謂終身官ノ保障ヲ有ス。然ルニ、一方ニ於テハ獨立ノ地位ヲ固守セシムル爲ニ制限アリ。他ノ官職ヲ兼テ及帝國議會又ハ地方議會ノ議員トナルコトヲ得サルカ如キ、父子兄弟ハ同時ニ検査官タルコトヲ得サルカ如キ是レナリ。

第四〇我國ノ制度(其二)

會計検査院ノ會議ハ、會計検査官ヲ以テ組織シ、總會議ハ院長之ヲ開キ、部會議ハ部長之ヲ開ク。計算検査ノ判決ハ、凡テ會議ニ於テス。其ノ總會議ニ於テスルト、部會議ニ於テスルトハ、院長ノ定ムル所ニ依ル。

總會議ハ、會計検査官現員ノ三分ノ二以上、部會議ハ其ノ部ノ會計検査官現員ノ半數以上出席スルニ非サレハ、議決ヲ爲スコトヲ得ス。議事ハ、多數決ヲ以テ之ヲ決ス。可否同數ナルトキハ、議長ノ決スル所ニ依ル。

院長ハ、總會議ノ議決ヲ不當ト認ムルトキハ、其ノ執行ヲ停止シ、議決ノ日ヨリ十日以内ニ、之ヲ再議ニ附ス。再議ノ議決ニ對シテハ、其執行ヲ停止スルコトヲ得ス。部長カ部會議ノ議決ヲ不當ト認ムルトキハ、其ノ執行ヲ停止シ、議決ノ日ヨリ七日以内ニ、之ヲ總會議ニ提出ス。

第二節 會計検査院ノ職權

第一、總說

會計検査院カ、司法的職權ヲ有スルコトハ、諸國ノ制度皆然ラサルハナシ、然レト

モ、其内容ニ至リテハ、多少ノ廣狹厚薄アルヲ免レズ。今茲ニハ專ラ我國ノ制度ニ付テ、説明セントス。

會計検査院ハ、官金ノ收支、官有物及國債ニ因ル計算ヲ検査確定シテ、會計ヲ監督スルモノナリ。其検査ヲ要スルモノ、左ノ如シ。

- (1) 總決算。
- (2) 各官廳及官立諸營造ノ收支及官有物ニ因ル決算。
- (3) 政府ヨリ補助金又ハ特約保護ヲ與フル團體及公立私立諸營造ノ收支ニ關ル決算。
- (4) 法律勅令ニ依リ、特ニ會計検査院ノ検査ニ屬セラレタル決算。

即チ、我國ノ検査院ニハ、事後監督ノ權ノミニシテ、事前監督ノ權ナキコトヲ知ルヘシ。

第二、検査ノ方法

會計検査院カ、検査監督スル方法ヲ大別スレハ二種トナル、即チ、書面検査、實地検査是レナリ。

會計検査院ハ歳入歳出總決算ノ外、検査ノ材料トシテ諸種ノ計算書ヲ受領スルノ權利ヲ有ス。

(1) 命令機關 各省大臣ハ仕拂豫算及支出計算書、歳入徴收官ハ歳入徴收額計算書、大藏大臣ハ豫備金支出ノ通知ヲ送付セサル可ラス。

(2) 出納機關 收入官吏ハ出納計算書、現金前渡官吏ハ仕拂計算書、金庫出納役ハ、出納計算書、金庫出納内譯書ヲ送付セサル可ラス。

而シテ此等ノモノニハ、多ク證憑書類ノ添付ヲ要ス。其他會計検査院ハ、各官廳ヲシテ検査上必要ナル簿書及報告ヲ提出セシメ、及主任官吏ノ辯明書ヲ求ムルコトヲ得ヘシ。

會計検査院長ハ以上書面検査ノ外、必要ト認ムルトキハ主任官吏ヲ派遣シ實地検査ヲ爲スコトヲ得。此ノ場合ニ於テハ、豫メ本屬長官ニ通知シ、該長官ハ主任官吏ヲシテ検査ニ立會ヲ爲サシムルコトヲ得。

第三〇〇 検査ノ内容

會計検査院検査ノ内容ハ、會計検査院法第十四條ニ規定スル所ニシテ、左ノ如シ。

(1) 總決算及各省決算報告書ノ金額ト、各出納官吏ノ提出シタル計算書ノ金額ト、符合スルヤ否ヤ。

(2) 歳入ノ賦課徴收歳出ノ使用、官有物ノ得有、沽賣、讓與及利用ハ、各其ノ豫算ノ規程又ハ法律勅令ニ違フコトナキヤ否ヤ。

(3) 豫算超過又ハ豫算外ノ支出ニシテ、議會ノ承諾ヲ受ケサルモノナキヤ否ヤ。之ヲ略言セハ、計算ノ正否、法規適用ノ正否、豫算遵守ノ正否、如何ヲ審査スルニ在リ。此内、豫算遵守ノ正否トハ、之ヲ詳言セハ、歳入ニ付テハ豫算ト現計ト差異アル場合ニハ如何ナル理由ニテ差異ヲ生シタルカ、歳出ニ付テハ、經費ノ支出カ豫算ノ款項ニ定メタル目的ト定額内ニアルヤ否ヤヲ審査スルヲ云フナリ。

第四〇〇 隨伴ノ權利

會計検査院ニ如上ノ職權ヲ遂ケシムル爲メニハ、種々之ニ隨伴セル權利ヲ與ヘタリ。例之、會計検査院ハ、検査ノ事項ニ付、當該官吏ニ對シテハ、審理書ヲ發シ、國務大臣ニ對シテハ、質問書又ハ注意書ヲ發スルコトヲ得ヘク。金庫ノ出納及簿記上ニ關ル各省ノ命令ニ付、其發布ノ前通知ヲ受ケ、意見アルトキハ之ヲ陳述スルコ

トヲ得ヘク。收入及支出ニ關ル規則ヲ定メ及既定ノ規則ヲ改正スル各省ノ命令ニ付テハ、其ノ發布ノ前通知ヲ受クルノ權アリ。又各地方官廳ヲシテ、其地ノ物價ヲ定期又ハ臨時ニ報告セシムルコトヲ得ヘシ。

第五、上奏ノ權利

會計検査院ハ、各年度ノ會計検査ノ成績ヲ上奏スルノ權アリ。又其ノ成績ニ付テ、法律又ハ行政上ノ改正ヲ必要トスヘキ事項アリト認ムルトキハ、併セテ意見ヲ上奏スルコトヲ得ヘシ。

第六、認可狀ノ交附

出納官吏ニ對スル此權利ハ、更ニ節ヲ認メテ、之ヲ説クヘシ。

第三節 責任解除及辨償處分

第一、責任解除

會計検査院ハ、出納官吏ノ計算書及證憑書類ヲ検査シ、正當ナリト判決シタルトキハ、該官ニ對シ認可狀ヲ付シ、其ノ責任ヲ解除ス。若必要ナル場合ニ於テハ、之ヲ

推問シ辯明又ハ正誤ヲ爲サシメ、尙正當ナラスト判決シタルトキハ、本屬長官ニ移牒シテ、處分ヲ爲サシム。

第二、再審判決

會計検査院ハ、認可狀ヲ交付スル後ト雖モ、其交付シタル日ヨリ五箇年以内ニ於テハ、(1)出納官吏ヨリ之ヲ請求スルカ(2)又ハ計算書ノ誤謬、脱漏、二重記載アルコトヲ發見シタルトキハ再審ヲ爲スコトヲ得。但シ詐僞ノ證憑ヲ發見シタルトキハ、五箇年後ト雖モ再審ヲ爲スコトヲ得。此等ノ場合ニ於テハ、前ニ該件ノ検査ヲ擔當セサリシ他ノ部ニ移シテ審査セシム。出納官吏ハ、會計検査院ノ再審ノ判決ニ對シテ、再ヒ審判ヲ請求スルコトヲ得ス。

要之、會計検査院ノ審判ハ一審ニシテ終審ナルコトヲ原則トシ、特別ノ場合ニ再審ヲナスモノトス。而シテ、如何ナル場合ニモ、三審ハ之ヲ行ハサルモノトス。

第三、辨償處分

出納官吏カ、其所爲ヲ以テ、政府ノ損失ヲ生シタル場合ニハ、各省大臣又ハ會計検査院ハ、辨償ヲ命スルコトヲ得。各省大臣カ之ヲ命シタル場合ニ於テ、負擔ノ責ヲ

免ルヘキ理由アリト信スルトキハ、會計検査院ニ對シテ其判決ヲ求ムルコトヲ得。

會計検査院ハ、出納官吏其ノ負擔スヘキ欠損金ノ辨償ヲ終ヘタルトキハ、認可狀ヲ交付ス。若シ出納官吏ニ辨償ノ責ナシト判決シタルトキハ、其既納ニカ、ル辨償金ヲ還付セシム。會計検査院ノ判決ニ據リ、辨償ノ責ヲ負フ者ハ、天皇ノ恩赦ニ依ルノ外、本屬長官之ヲ減免スルコトヲ得ス。

第三章 立法監督

第一、立法監督ノ趣旨

決算既ニ司法監督ヲ受クルトセハ、其他二重ノ監督ヲ要セサルニ似タリ。然ルニ所謂立法監督ト稱シ、立法機關タル議會ヲシテ更ニ審査監督セシムルハ何ソヤ。是レ、豫算ハ議會ノ協賛ニ依リテ成立セルモノナレハ、豫算施行ノ結果タル決算モ亦之ヲ議會ニ提出シテ、果シテ圓滿ニ行ハレシヤ否ヤヲ検査セシムル必要アルナリ。加之決算ハ豫算ノ結果ナレハ、決算ノ提出ハ即チ豫算ノ議定ニ好箇ノ資

料ナリ。又一方ニハ、會計検査院ノ審査ト雖モ、決シテ誤リナキヲ保スヘカラス、故ニ更ニ他ノ機關ヲシテ兩者ノ見界ノ異ル所ヲ判斷セシムルモ、亦國家ノ政務トシテ必要ナルヘシ。是レ、立法監督ノ存スル所以ナリ。

第二、決算ノ提出

帝國憲法第七十二條ニ曰ク。

國家ノ歳出歳入ノ決算ハ、會計検査院之ヲ検査確定シ、政府ハ其ノ検査報告ト俱ニ、之ヲ帝國議會ニ提出スヘシ。

會計法第十七條ニ曰ク。

政府ヨリ帝國議會ニ提出スル總決算ハ、會計検査院ノ検査報告ト俱ニ、左ノ文書ヲ添付スヘシ。

第一、各省決算報告書

第二、國債計算書

第三、特別會計々算書

此検査報告ニハ、計算ノ誤謬、豫算及法律ノ違背等ヲ記載シタルモノナリ。又特別

會計決算ニハ、各特別會計決定計算書ヲ添付スヘキコトハ、既ニ之ヲ述ヘタリ。
第三委員附托

決算カ政府ヨリ提出セラレ、議長之ヲ議院ニ報告スルトキハ、決算委員ニ附托スルモノトス。

豫算ハ、先ニ衆議院ニ提出スヘキモノナルコト、憲法ノ規定スル如シ。然レトモ、決算ニ至リテハ、斯ノ如キ制限ナシ。唯慣例上、衆議院ヲ先ニスルコトアルノミ。

決算委員ハ、貴族院ニ於テハ二十七人、衆議院ニ於テハ四十五人トス。其委員長ノ選舉、分科會總會等ノ手續ハ、全ク豫算委員會ニ同シケレハ、之ヲ略ス。

決算ノ審査ハ、會計検査院ノ検査報告ト、國務大臣及政府委員ノ答辯トヲ比較シテ之ヲ決スルモノトス。委員會決定ノ結果ハ、決算委員長之ヲ本會議ニ報告スルモノトス。

第四、本會議

本會議ニ於テ委員長ノ報告アルトキハ、之ヲ議題トシテ可否ヲ議決ス。政府ノ處置ニシテ不法不當ノモノタルコトヲ議決スルモ、直接ニ國法上ノ效果ナシ。何ト

ナレハ、豫算ハ將來ヲ豫想スルモノナルモ、決算ハ單ニ過去ノ事實ニ過キサレハナリ。唯政治上、國務大臣ノ責任問題トナルハ、勿論ノコトニシテ、或ハ上奏、決議案トシテ、現ハルヘク、或ハ大臣辭職ノ原因トナルコトモアルヘシ。我帝國議會ニテハ、從來豫算ノ議決ニノミ全力ヲ注キ、決算ニ對シテハ等閑ニ附スルノ譏ヲ免レサリシモ、近來決算ニ對シテモ十分ナル審査ヲナシ、以テ立法監督ノ本分ヲ盡スノ機運ニ向ヒタルハ、深ク慶スヘキ現象ナリトス。

第四章 決算ニ關スル注意

第一節 決算調製ノ期日

第一、決算調製期日短縮ノ必要

前述ノ如ク、決算ヲ議會ニ提出スルハ、必要ハ、一ハ以テ國務大臣ノ責任ヲ明ニシ、一ハ以テ豫算議定ノ資料ニ供シ、且政府ノ行フ所ト會計検査院ノ言フ所ト何レカ正シキヤヲ審査スルニ在リ。然ルニ此等ノコトハ、決算ヲ成ル可ク、早く議會ニ提出セシムルハ行フ可ラサルコトハ、ナルナリ。即チ豫算施行ノ責ニ當リシ國務大臣

交迭スレハ、責任ヲ匡スヲ得ス。提出サレタル決算ト豫算トノ間ニ數年ノ懸隔アラハ豫算議定ノ參考トナスコトヲ得ス。豫算施行ノ時ヨリ多年ヲ經過スレハ政府ト検査院トノ正否ヲ斷スルニ熱心ナラサルニ至ル可シ。又會計検査院ノ審査上ヨリ、云フモ、年次ヲ經ルコト久シケレハ證憑從テ湮滅シ、以テ審査ノ實ヲ擧クルニ難シ。之ヲ以テ、何レノ方面ヨリ見ルモ、政府カ決算ヲ調製スル時期ハ、及フ丈ケ之ヲ短縮セサル可ラス。

第二、我國ノ慣例

決算調製ノ期日ハ、豫算編製ノ期日ト同シク、我國ノ制度ハ何レノ國ニ比スルモ大ナル遜色ナク、大體ニ於テ良好ナリト云フヲ得ヘシ。何トナレハ、從來政府カ決算ヲ議會ニ提出スルハ、年度後一年七八ヶ月、主計簿締切後一年ハ後ニ在レハナリ。併シ從來ヨリ我決算調製ノ時期ハ今日ノ如シト云フニアラス。明治二十三年以前ニ於テハ、年度經過後發布ノ日マテ、三年四年乃至五年ニ近キコトアリキ。然ルニ二十三年以後ハ、年度經過後二年以内一年半位ノ間ニ提出ヲ見ルニ至レリ。然ルニ、近來ニ至リ、此好例ニ背クモノヲ生スルニ至レリ。即チ三十四年度ノ決算

ヲ三十七年ノ十一月ヲ開會日トセル議會ニ提出セシコト是レナリ。即チ此場合ニ於テハ、年度經過後議會提出迄二年七ヶ月ヲ要シタルモノナリ。斯ノ如キハ、將來先例トナラサランコトヲ希望セサルヲ得ス。之ヲ以テ、第二十一議會ニ於テ、衆議院ニ左ノ法律案(會計法中改正法律案)ヲ提議スルモノアルニ至レリ。

會計検査院ノ検査ヲ經テ政府ヨリ帝國議會ニ提出スル總決算ハ總豫算ト同一ノ様式ヲ用キ、左ノ事項ヲ明記シテ、翌々年度ノ帝國議會開會ノ始メニ於テ提出スヘシ會計法第十六條

而シテ、或ル說ニ從ヘハ、決算ハ翌々年度ヲ竣タス、翌年度ノ帝國議會ニ提出スルヲ得ヘシト云フモノアレトモ、實際上ニ行フコトハ難事タルヘク、予輩ノ信スル所ヲ以テスレハ、以上ノ法律案ハ其當ヲ得タルモノナリ。

第二節 會計検査院ノ監督

第一、事前監督ノ得失

事前事後監督ノ得失ニ付テハ、既ニ監督制度論中ニ述フルカ如ク、兩者共ニ偏廢

スヘカラス、行政監督ハ、即チ此主義ニ則レリ。然ラハ司法監督ニハ如何ト云フニ、吾人ハ一般ニ事前監督ヲ用フルノ必要ナクシテ、時ニ不便ヲ生スヘキヲ知ル。然レトモ一概ニ或論者ノ如ク、行政監督ニ干涉スル口實ヲ以テ之ヲ排斥スルコトヲ得ス。何トナレハ、更ニ行政監督ヲ事前ニ於テ監督スルハ必要ナシト云フコトヲ得サレハナリ。要之吾人ハ白耳義和蘭伊太利ニ倣フテ、事前監督ヲ法外ニ擴張スルノ必要ヲ見スト雖モ、彼ノ國庫剩餘金又ハ歳出臨時部ニ關スル事項ノ如キハ、或金額ヲ限リ、其金額以上ヲ支出セントスル場合ニハ、會計検査院ノ事前監督ヲ要ストスルヲ有利ナルヘシト信ス。此場合ニ於テ、彼事後監督ハ唯責任ヲ匡シ將來ヲ戒ムルニ止リテ、既往ノ事實ハ回復スルニ由ナキナリ。

第二〇官有物ノ監督

官有物ノ監督カ、現金出納ノ監督ト同シク、國家ニ必要ナルハ論ナキ所ナリ。然ルニ、官有物中物品即チ動産ニ關シテハ、會計法(第二十六、二十七、二十八條)ノ外、物品會計規則等アリテ、略監督ノ實ヲアクルヲ得ヘキモ、不動産ニ關シテハ、其監督規定不備ニシテ、會計検査院ノ如キハ、其權限唯決算上ニ現ハル、場合ニ限リテ審

査スルコトヲ得ルハ、若シ官有物ヲ他ノ不當ニ低價ナル民有物ト交換スルカ又ハ無償ニテ貸與スル場合ノ如キハ、會計検査院ハ全ク之ニ與ルコトヲ得サルナリ。故ニ官有財産管理規則第十六條十七條ノ規定、即チ各省大臣カ所管官有財産目錄及増減異同報告書ヲ毎年帝國議會ニ報告スルハ、先ツ會計検査院ノ検査ヲ經ルコト、決算ト同様ナラシメンコトヲ希望スルモノナリ。

第三節 司法監督ト立法監督トノ關係

既ニ立法監督ノ趣旨ヲ説明セル所ニ於テ、立法監督ノ一ハ行政府ト會計検査院ノ意見異ル場合ニ、果シテ何レカ正シキヤヲ判斷セシムルニアルコトヲ言ヘリ。然ルニ、行政府ニ對シテハ、責任アル國務大臣又ハ政府委員ノ陳述ニヨリテ事相ヲ明了ナラシムルコトヲ得ルモ、會計検査院ノ意見ニ付テハ、唯其報告ニカ、ル決算検査報告ニ由ルノ外ナシ。然レトモ、此報告ハ簡單ニシテ、到底事實ノ真相ヲ知ルコトヲ得ス。故ニ、決算ニ付テハ、會計検査官ヲ議院ニ出席セシメテ、之ヲ聽取スルトナスカ、如キハ必要ハコトナルヘシト信ス。此説タルヤ、決シテ吾人ノ一私

言ニアラス。彼ノ現今財政ノ碩儒ルロア、ボリユー氏ノ如キモ、其著「財政原論」ニ於テ明言シテ曰ク「今日ノ制ニ據レハ、議院ハ精密ニ會計官ノ所業ニ干涉セス。會計検査院ハ支出命令官ノ所爲ヲ裁判スルノ權利ヲ有セスシテ、兩院各監督ノ一半ヲ掌ルニ過キス。若シ會計検査院ノ吏員ヲ以テ顧問トシテ決算調査委員會ノ會議ニ參セシメハ、其陳スル所ノ意見ハ單ニ検査院報告ニ於テスヨリ遙ニ效力アルヘク、大ニ今日ノ弊ヲ療スルニ至ラント」。

最近豫算決算論

終

附錄

豫算膨脹ノ趨勢ヲ論ス

豫算膨張ノ趨勢ヲ論ス

第一節 諸國ノ状態ヲ叙ス

第一〇概説

「祝セヨ此ハ十億ハ豫算ヲ祝セ吾人ハ再ヒ之ヲ見ルコトナカルヘシ」トハ千八百三十年ニ於テ佛國ノチエー氏カ叫ヒタル語ナリ爾後此語タル世人ニ膾炙セラレテ數々人ノ引用スル所トナレルモ一國豫算増加ノ大勢ハ世運ノ進歩ニ隨伴シテ暫ラクモ止マラス佛國ニ於ケル豫算史ヲ繙カハ千八百三十年ニオキテ稀有ノ事例トシテ慶賀セラレタル十億法ノ豫算ハ千八百六十三年ニ於テハ二十億法ニ達シ更ニ進ンテ千八百七十年及ヒ七十一ニ至リテハ一躍シテ三十億法ニ及ヒ千八百八十一年八十二年及ヒ八十三年ニ於テハ四十億法以上ノ豫算ヲ編製スルニ至レリトイフ佛國ノ大藏大臣トシテ命名アリシレオンセイ氏ハ其ノ著書ニ於テ此ノ状態ヲ説キテ曰ク吾人ハ十億ニ達シタレトモ吾人ハ決シテ之ニ止マラサルハ勿論尙ホ前進スヘシ吾人ハ十億以下ノ豫算ヲ放棄シ復タ決シ

歐洲ノ大勢

テ、歸ルコトナキ海外ニ航シタリト
 而シテ斯クノ如キ趨勢ハ、獨リ一二ノ國ニ於テ見ルニアラスシテ、實ニ世界ノ大勢ナリ。聞ク、歐洲諸國ハ千八百六十五年ヨリ千八百七十九年ニ至ル十四年間ニ經費ヲ増スコト四十六億七千六百萬法ニシテ、九十九億六千五百萬ノ經費額ヨリ百四十六億四千一百萬ノ經費額ニ上レリト。又其ノ内ニ大國ノミニツキテ計算所スル所ニヨレハ、千八百六十七年度ヨリ千八百七十七年度ニ至ル十年ノ間ニ九十三億六一百萬ヨリ百四十一億四千六百萬ニ進メリト。今其ノ概數ヲ取リ之ヲ百億ト百五十億ト假定スレハ、實ニ五十億ノ増加ニシテ即チ五割ニ當ルヲ見ルナリ。要之、豫算増加ノ趨勢ハ、其ノ勢駭々乎トシテ駟馬モ及ハス、是レ實ニ看過ス可カラサル重大ノ事項タリ。即チ吾人ハ本章ニ於テ、内外國ニ於ケル事例并ニ其ノ原因ニ付キテ推究スル所アラントス。

第二、諸國歲入出増加表

(甲) 各國歲入増加表

國名	千八百八十年	千八百八十五年	千八百九十年	千八百九十五年	千八百九十年	千八百九十五年	千八百九十年
露西亞	百四十四	百六十六	百九十二	百九十八	百九十八	百九十八	百九十八
佛蘭西	四八	四二	四〇	五二	一、三二	一、三六	一、三六
英吉利	三	九	五	五	八	一〇	一〇
北米合衆國	—	—	二	九	八	八	一〇
獨逸	三	七	二	三	一、五	六	七
伊太利	—	一	一	一	七	七	七
奧地利	—	四	一〇	二〇	四	六	六
匈牙利	—	—	—	—	三	三	—
西班牙	一九	三	六	一	三	三	三
日本	—	—	—	五	一	一	一

附錄 豫算膨脹ノ趨勢ヲ論ス 諸國ノ狀態ヲ叙ス

即チ我國ニ於テハ、歲入歲出共ニ八九年前ニ比シテ二倍、十二年前ニ比シテ約三倍ノ膨脹ヲ見ルニ至リシモノナリ。

第二節 豫算膨脹ノ原因

豫算膨脹ノ大勢以上ノ如シトセハ、其ノ原因ハ果シテ那邊ニアルヘキヤ。一方ヨ

明治二十六年	八九,〇四三,三〇〇	八四,五六一,八七三	明治三十三年	二五九,七五五,八二二	二九二,七五〇,〇五九
同二十七年	九三,四二六,〇五五	七九,二八六,〇四一	同三十四年	二七一,二五四,三三三	二六六,八五六,八二四
同二十八年	九八,五九二,三三六	八五,三三七,一九九	同三十五年	二六六,四八九,四八八	二八九,三三六,三六六
同二十九年	一五三,八九七,九〇七	一六八,九六六,五九九	同三十六年	二五二,四七七,五五二	二四四,七七三,三三六
同三十年	二〇八,三七七,〇八八	二三三,六七八,八四四	同三十七年	三〇九,六七三,三三三	二八〇,三三三,三三二
同三十一年	二七三,四三三,八四八	三一九,七七七,五九九	同三十八年	三〇四,三三三,九九八	三二〇,五三四,四三六
同三十二年	三三三,九七七,九六六	三五四,二六三,五五六			

リ之ヲ觀察スレハ。

(1) 昔時ニ於テハ歲計豫算ノ方法備ハラズ、決算ノ法規整ハスシテ、行政官ノ冗費ヲ容セシモノ。今日ニテハ豫算決算ノ細目具備シテ、些細ノ金額ト雖モ又タ行政官ノ私曲ヲ許サ、ルニアラスヤ。

(2) 又昔時ニ於テハ、行政官ノ選任ニ一定ノ資格ト一定ノ定員トヲ以テ制限セシメ、一ニ上官ノ私意ニ依ルモノアリ。從テ種々ノ情實ノ爲ニ冗員ヲ措キテ、爲ニ一國財政ノ膨脹ヲ來セシコト自然ノ狀況ナリキ。然ルニ今ヤ官吏任命ノ法規大小整備シテ、用ルニ有爲ノ人ヲ以テシ、限ルニ一定ノ人員ヲ以テセルニアラスヤ。

單ニ皮相的ニ以上ノ事例ヲ見レハ、豫算ハ却テ減少スヘキモノ、如シ。然ルニ事實之ニ反スル所以ハ何レニアリヤト問ハ、曰ク一國經濟ノ進歩ナリ、曰ク國家積極的施設事務ノ増加ナリ、曰ク海陸軍費ノ激進ナリ、曰ク國債費ノ加重ナリ。而シテ其ノ特殊的原因ヲ求ムレハ、數フルニ違アラサルナリ。

第一、一國經濟ノ進歩

昔時、國家經濟ノ幼稚ナルニ當リテヤ、貨幣ノ流通額サマテ多カラス、從テ物價低廉ナリシモ、今ヤ、金銀ノ產出ハ益増加シ、貨幣ノ鑄造年ヲ逐フテ進ミ、加之經濟信用ノ結果トシテ、貨幣ノ代用ヲナス紙幣及ヒ各種ノ手形ノ流通非常ナル勢ヲ以テ増加シ、從テ貨幣ノ價格下落シテ物價日ニ上騰スルニ至レリ而シテ物價騰貴ノ一國財政ノ上ニ及ホス影響如何ト云フニ實ニ非常ナル勢力ヲ占ム。何トナレハ、官吏ニ與フ可キ俸給、種々ノ施設ニ伴フ勞銀、竝ニ一般物品ノ購入費ノ額ハ、之ニ由テ増加セサルヲ得サレハナリ。是レ、一方ニテハ、一國財政上ニハ喜ハシカラサル現象ナルカ如キモ、他ノ一方ニ於テハ、民力國富ノ増加ヲ證明シ、從テ人民ヨリ徵收スヘキ租稅其他ノ收納物ハ大ナル苦痛ナクシテ得ヘキカ故ニ、結局何等ハ悲ムヘキ理由ヲ見サルナリ。

第二、積極的施設ノ増加

國家究極ノ目的ハ國力ノ發達國民ノ進歩ニアルカ故ニ、安リニ財政ヲ縮少スルヲ以テ策ノ得タルモノトスルコトヲ得フ。一方ニ無用ノ費用ヲ節約スルト同時ニ、他ノ一方ニテハ、大ニ國力ヲ發展シ、人民ハ有形的無形的ノ利益ヲ増加セシメ

サル、可ラス。之カ爲メニハ、或ハ教育事業ノ如キ、或ハ交通事業ノ如キ、或ハ實業獎勵ノ如キ、百般ノ事業ニ對シ多大ノ經費ヲ吝マスシテ從事セサル可カラス。若シ之ニツキ多少ノ遲緩アルトキハ、外列國ノ競爭ニ對シ忽チ劣者ノ地ニ立タ、サル可ラサルナリ。

今試ミニ諸國ノ教育費ニ付テ見ルニ、英國ニ於テハ

千八百十七年	八二、八七二
千八百三十七年	一七四、五二三
千八百五十七年	一〇六、二四二六
千八百六十七年	一五九、五四七
千八百七十七年	三一八、九二〇
千九百二年	一三〇、三四、四五一

又佛國ニ於テハ

千八百三十年	二、二五八、九五七
千八百三十五年	一、二、三五二、三三一
千八百五十二年	二、二九五八、八九三
千八百六十九年	四〇、五八四、〇〇〇

千八百七十九年
千九百三年

七二四〇〇〇〇〇
二一六一〇二〇九一

即チ之ヲ三十年以前ニ比較スルトキハ、英ハ八倍トナリ、佛ハ五倍トナリシ割合ナリ。而シテ英國ノ如キ從來教育上放任自由主義ヲ取リシモノモ、國民教育ノ大勢上、保護干涉ノ主義ヲ參酌セルノ結果、今後ノ教育費ハ益長足ノ進歩ヲ以テ増加セントス。而シテ獨逸帝國ノ如キ、教育事業ノ爲ニ非常ナル巨額ヲ消費シツ、アルハ、人ノ普ク知ル所ナリ。

第三、國防的施設ノ増加

政府ノ職務ハ、一方ニ於テ前述ノ如ク國民ノ福利ヲ増進セシムルト共ニ、他ノ一方ニ於テハ大ニ陸海軍ノ設備ヲ完全ニシテ、外列國ニ對シテ一國ノ勢力ヲ示シ平和破裂ノ曉ニ於テ、他國ノ攻撃ニ堪ルヲ期セサル可カラス。斯クノ如キハ、今更吾人ノ喋々ヲ要セサル所ニシテ、左ノ表ヲ見ハ思ヒ半ニ過クルモノアラシ。

英國軍費增加表

年 度	陸 軍 省	海 軍 省	合 計
一九〇二	七三、八五九、八九九	三三、三七六、七二七	一〇六、二三五、六一六
一八七六	一五、九二二、〇〇〇	一一、三六五、〇〇〇	二七、二八七、〇〇〇
一八七四	一五、〇九八、五四九	一〇、六八〇、四〇四	二五、七七八、九五二
一八六八	一五、五二五、〇〇〇	一一、三六六、五四五	二六、八九一、五四五
一八五七	一二、九一五、一五六	一〇、五九〇、〇〇〇	二三、五〇五、一五六
一八四七	一〇、四八八、二七三	八、〇一三、八七三	一八、五〇二、一四六
一三九八	八、四九三、八七二	五、四九〇、二〇四	一三、九八四、〇七六
一三八五	七、五五八、〇五六	四、〇九九、四二九	一一、六五七、四八五
一八二三	八、七三九、四八九	五、六一三、一五一	一四、三五二、六四〇
一八二七	一一、〇七九、三三四	六、六二三、〇六二	一七、七〇二、二九六

佛國軍費增加表

年 度	陸 軍 省	海 軍 省	合 計 額
一八三〇	二二三、六一三、〇〇〇 _{フラン}	九〇、三六七、〇〇〇 _{フラン}	三二三、九九〇、〇〇〇 _{フラン}
一八四五	三〇二、四〇〇、〇〇〇	一一四、七六〇、〇〇〇	四一七、一六〇、〇〇〇
一八四七	三四九、三一〇、〇〇〇	一三三、七三二、〇〇〇	四八三、〇四二、〇〇〇
一八五八	三六五、七四八、〇〇〇	一三三、四二六、〇〇〇	四九九、一七四、〇〇〇
一八六八	四六一、〇九三、〇〇〇	一九七、三〇六、〇〇〇	六五八、三九九、〇〇〇
一八七六	五〇〇、〇三七、〇〇〇	一六五、八九三、〇〇〇	六六五、九三〇、〇〇〇
一八七七	五三五、六六三、〇〇〇	一八五、九一五、〇〇〇	七一一、五七八、〇〇〇
一八七八	五三九、四八四、〇〇〇	一九二、三二七、〇〇〇	七三一、七一、〇〇〇
一八七九	五五三、〇四三、〇〇〇	一九六、二一六、〇〇〇	七四九、二五九、〇〇〇

即チ佛ニ於テハ、二十五年前ニ比シテ軍事ニ費スル所一倍半トナリ、英ニ於テハ、約四倍トナレリ。

今千九百二年ニ於ケル歐米強國ノ經常歳出ト軍事費トノ比較ヲ見レハ左ノ如シ。

國 名	經 常 歳 出 額	軍 事 費
英 吉 利	一、七六三、五九〇、〇〇〇 _圓	一、〇〇五、六五五、〇〇〇 _圓
佛 蘭 西	一、四四〇、九三三、〇〇〇	四〇八、九一三、〇〇〇
獨 逸	九八六、四一四、〇〇〇	四三五、八一五、〇〇〇
露 西 亞	一、八五六、九五〇、〇〇〇	四三七、七九六、〇〇〇
合 衆 國	一、三〇二、〇四一、〇〇〇	四三〇、〇〇〇、〇〇〇
一 九 〇 二	七一五、四八四、三六八	三〇六、七九八、七三八
		一、〇二二、二八三、一〇六

レオンセイ氏カ、各國經費ノ増加スル所以ヲ論シテ、其増加中三分ノ二ハ軍事費及ヒ戦争ノ爲ニ募集シタル公債ノ費用ナリト、言ヘル説ヲ實證スルヲ見ルヘシ。

附録 豫算膨脹ノ趨勢ヲ論ス 豫算膨脹ノ原因

本邦軍事費增加表

年 度	陸 軍 費	海 軍 費	年 度	陸 軍 費	海 軍 費
明治元年第一期	一〇,九七九,九六四		同 九年度	七〇,二一八,四四	四,四四九,九九八
同 二年第二期	一,五四七,六六六		同 十年度	六,一三三,七四	三,一六七,五二
同 三年第三期	一,五〇〇,七四		同 十一年度	六,四四三,八一	二,八二〇,五二
同 四年第四期	三,五三三,六二		同 十二年度	八,一〇〇,三六三	三,一三八,七五二
同 五年第五期	九,五六八,三九一		同 十三年度	八,五九四,四〇〇	三,四一五,八七二
同 六年第六期	九,六八八,〇七		同 十四年度	八,九一〇,九四八	三,一六〇,七九
同 七年第七期	一〇,四八八,四三三		同 十五年度	九,〇〇一,四六五	三,四〇九,六五四
同 八年第八期	一〇,七四八,八八		同 十六年度	一〇,五六七,三三四	七,〇一五,七七
同 八年度	六,九九七,七三	二,八五八,四三	同 十七年度	一一,二〇〇,二二	六,二六〇,六五

同 十八年度	一〇,一七八,〇九五	五,三四三,三三	同 二十九年度	五三,四三三,五四	二〇,〇〇五,七六八
同 十九年度	一一,八四六,四九二	八,八〇八,八八	同 三十年度	六〇,一四七,九八八	五〇,三九四,五三四
同 二十年度	一三,三四四,〇九	九,八八二,七五	同 三十一年度	五三,八九七,六五三	五八,五九二,九〇
同 二十一年度	一三,九七六,八四八	九,八〇九,五五	同 三十二年度	五三,五五一,一九八	六一,六六一,六一〇
同 二十二年度	一四,二六〇,六七八	九,三三三,一五	同 三十三年度	七四,八八六,二〇一	五八,二七四,八九五
同 二十三年度	一五,五三三,〇七九	一〇,一五九,三四	同 三十四年度	五八,三八一,七九〇	四三,九九二,二八
同 二十四年度	一四,一八〇,一六六	九,五〇〇,六三	同 三十五年度	四九,四三三,〇五九	三六,三三六,一八一
同 二十五年度	一四,七三三,二五	九,一三三,一六	同 三十六年度	四三,一七一,九六八	二九,一九六,三三〇
同 二十六年度	一四,七三三,三三七	八,一〇〇,九三	同 三十七年度		
同 二十七年度	一〇,四〇八,九三	一〇,三三三,一四	同 三十八年度		
同 二十八年度	一〇,二五五,九五	三,五〇〇,三九			

附録 豫算膨脹ノ趨勢ヲ論ス 豫算膨脹ノ原因

〔備考〕三十七、八年度ハ日露戦争ノ爲メ非常事件
 中ヨリ支出セル爲メ茲ニ掲グル能ハス
 明治三十三年度ノ軍事費ヲ二十六年度ノ軍事費ニ比スレハ實ニ六倍ノ増加ヲ
 ナセルヲ見ルナリ。而シテ三十九年度豫算トシテ政府ノ計劃スルモノヲ聞クニ
 一般行政費一億三千万圓ニ對シ、軍事費ハ一億六千万圓ヲ超ユルト云フ。
 第四國債費ノ増進
 國債ヲ以テ一箇人ノ債務ニ比シ、憂フヘキ事柄トナシタル時代ハ已ニ過去ノ夢
 ト過キ去リテ、今ヤ各國ハ進ンテ國債ヲ起シ以テ種々ノ事業ヲ起シ、他日偉大ナ
 ル結果ヲ收メントス。加之、國家ニモ亦天災事變等種々ノ出來事アリテ、不時ノ經
 費ヲ要スルコトアリ、是等ノ事情ノタメ各國々債ノ増進ハ實ニ驚クヘキモノア
 リ。今試ニ現今各國ノ國債高ヲ表記スレハ左ノ如シ。

國名	國債額	一人分頭額
佛國	二、二九八、七三二、三〇〇	五〇、五〇
獨逸	一、二五一、七五八、〇〇〇	一六四、五〇

〔備考〕日本ハ千九百五年現在ニシテ
 他ハ千九百〇三年ヲ取ル

國名	國債額	一人分頭額
佛國	一、二一五、〇一七、〇〇〇	三一一、一〇
獨逸	一、四七二、七五〇、〇〇〇	二六、〇〇
伊太利	五、〇四一、一八九、〇〇〇	三一、五〇
和蘭	九二一、八九〇、〇〇〇	一六九、五〇
露西亞	七、七二八、五一九、三〇〇	七二、五〇
英國	七、九四四、九八一、〇〇〇	一八五、〇〇
米國	四、七〇九、二二八、〇〇〇	六一、五〇
日本	一、八六四、九一八、九〇〇	三九、五〇

本邦國債費增加表

附錄 豫算膨脹ノ趨勢ヲ論ス 豫算膨脹ノ原因

年 度	國 債 費	年 度	國 債 費	年 度	國 債 費
明治元年第一期	—	同 十年度	一六、七四、五八	同 二十年度	三、四九、六〇
同 二年第二期	—	同 十一年度	一六、六〇、二七	同 二十一年度	三、七七、七四
同 三年第三期	—	同 十二年度	一七、九〇、六三	同 二十二年度	一八、三二、一〇
同 四年第四期	四九、三三	同 十三年度	一七、四〇、五三	同 二十三年度	二〇、三三、九三
同 五年第五期	四九、三三	同 十四年度	一七、七七、二三	同 二十四年度	一八、五五、八〇
同 六年第六期	二、九六、〇三	同 十五年度	一三、四四、六一	同 二十五年度	一八、五七、二六
同 七年第七期	三、四一、四〇	同 十六年度	一六、六六、三三	同 二十六年度	一九、四五、九八
同 八年第八期	一、五三、〇四	同 十七年度	一九、八九、六五	同 二十七年度	一九、七二、一四
同 八年度	四、四三、〇一	同 十八年度	一四、一〇、三七	同 二十八年度	二四、一九、八五
同 九年度	四、九三、七七	同 十九年度	二四、〇九、六一	同 二十九年度	三〇、五〇、一七

三十九年度以後ニ於テハ日露戦争ノタメ十數億ノ公債ヲ募集シタルニ由リ、之ニノミ毎年一億一千万圓ヲ要スルコト、ナレリ。

第五〇結論

一 國財政膨脹ノ一般的原因ハ大略以上ノ如クニシテ、其ノ小ナルモノニ至リテハ今茲ニ舉クルニ遑ナシ我國ノ如キ近時國運ノ隆盛ト共ニ歲計豫算ノ激増驚クヘキモノアリト雖モ仔細ニ其ノ原因ニ付キテ看察スルトキハ其ノ原因各皆已ムヲ得サルモノニシテ之ヲ一國經濟上ノ進歩ニ比照シテ憂フヘキモノ少ナキハ賀ス可キコト、云ハサル可カラス惟フニ一國歲計豫算ノ膨脹ハ決シテ忌ムヘキコトニアラス其ノ厭フヘキハ其ノ膨脹原因ノ如何ニ存ス。

同 三十年度	二五、五四、七三	同 三十四年度	一七、七〇、一九	同 三十八年度	三五、八三、六四
同 三十一年度	一六、三九、八六	同 三十五年度	四、七六、三三	同 三十九年度	
同 三十二年度	一三、三六、九三	同 三十六年度	四、四〇、一〇		
同 三十三年度	一四、八四、二三	同 三十七年度	一三、五五、一八		

發行所

禁漢譯



明治四十年一月十二日印刷
明治四十年一月十六日發行

著者 工藤重義

發行者 森山章之丞

發行者 江草斧太郎

印刷者 松澤虹三

東京市神田區
一ツ橋通町七番地
東京市神田區
表神保町二番地

有斐閣書房
同文館



近最豫算決算論與付

定價金壹圓貳拾錢

寶壽
寶壽



寶壽
寶壽

寶壽
寶壽

明
崇禎
十年
二月
十六日
發行

明
崇禎
十年
二月
十六日
發行

寶壽
寶壽
寶壽
寶壽
寶壽
寶壽
寶壽
寶壽

KINSHODO-SHOTEN
錦松蘭書店
東京 神田 保町

終